# 島原半島うみやま街道

## ー歴史と水と温泉のまちー

| | 人口 | 面積 |
|---|---|---|
| 島原市 | 4.4万人 | 83.0㎢ |
| 雲仙市 | 4.2万人 | 214.3㎢ |
| 南島原市 | 4.4万人 | 170.1㎢ |

2019年1月現在

## 人のくに、美のくに九州　（日本風景街道Ｑ－⑮）

雲仙公園名所図会（大正１０年）吉田初二郎氏制作

砂防締切堤防内のしまばら火張山花公園（島原市）から雲仙岳を望む

# 目次


一　島原ドラマチック

二　ぐるっと一周、島原ロマン街道

三　火山と共生のジオパーク街道

1　息づく大地の旅
2　溶岩ドームに大接近
3　インフラストック・ツアー
4　島原大変肥後迷惑

四　祈りと巡礼の街道

1　島原城
2　キリスト教国
3　南蛮貿易と口之津
4　原城跡に立って

五　癒しの温泉リゾート街道

1　外国人避暑地
2　温泉めぐり
3　温泉と地獄

六　島原の四季を楽しむ

1　四季を彩る花々
2　島原を食べる

平成新山の溶岩ドーム（世界ジオパーク）

雲仙のミヤマキリシマ

高温の泉源（小浜温泉、雲仙市）

島原城（島原市）

原城址（世界文化遺産、南島原市）

# 一　島原ドラマチック

## 火山噴火で出来た島原半島の自然、世界ジオパーク
## 激しく、悲しい原城を舞台に歴史ドラマ、世界文化遺産

長崎～阿蘇・久住～別府と温泉地は九州を横断して連なっている。その地下は九州島を割るように、大断層が走り、帯状の大陥没地帯となって、その割れ目から火山が連なって活発な活動を続けてきた。島原風景街道は、阿蘇路とやまなみ風景街道につながり九州横断の風景街道の起点となっている。火山活動、溶岩が造る自然の造形、癒しの温泉群、世界文化遺産の潜伏キリシタン関連遺跡、山を彩る花々など、魅力は尽きない。

九州を南北に二分するこの陥没帯は火山が噴出した溶岩や火山灰で埋まって、目には見えにくい。しかし、雲仙・島原半島は中央部が大きく落ち込んだ陥没地形を目視できる。国道５７号の橘湾沿いにある千々石展望台、愛野展望所に立つと、海に落ち込む急崖とそれに連なる断層（千々石断層）の凹みを見ることができる。

島原半島の入り口は諫早湾と橘湾の間の細い首、そこから大きく膨らんだ胃袋形をしている。食道と胃を取り出したような地形だ。東西約４㎞、南北約３０㎞。中央に首座・雲仙普賢岳（標高１３５９ｍ）、それに妙見岳、国見岳が寄り添い、さらに１００ｍ級の野岳など五山、雲仙は「三岳五峰」の総称だ。平成２年に始まった普賢岳の噴火は、「平成新山」を造り普賢岳を越えて標高１４８３ｍとなった。その頂上には、巨大な溶岩ドームが残り、厳重な監視体制が敷かれている。

島原うみやま街道の最大の魅力は「生きている大地・火山」を目の当たりに出来ることだ。日本初の世界ジオパークに登録された。雲仙・仁田峠（第２展望台）に登れば、溶岩ドームを目の前にして、足元には静かな有明海が広がり、遠く阿蘇五岳が雲の上に顔を出している。春は山を彩るミヤマキリシマ、夏は白いヤマボウシ、秋は紅葉、冬は霧氷。小浜、雲仙、島原は泉質、湯加減、それぞれ特徴のある温泉で心と体を癒してくれる。

火山噴火は温泉の恩恵と共に、麓の住民に苦しみを与えた。それだけではない。島原の乱（島原・天草一揆）での切支丹住民らの「ジェノサイド」（大量虐殺）の舞台・原城跡等、悲しい歴史もある。世界文化遺産（「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」）に、平成３０年７月４日登録され、外国人も含め多くの人が自然と歴史―「雲仙島原ドラマチック」に訪れている。

### 島原半島うみやま街道――歴史と水と温泉のまち―

島原半島は、長崎県の南部に位置し、熊本県天草、阿蘇山が遠望できます。半島中央部にそそり立つ雲仙普賢岳、今なお溶岩ドームが峻立し、一条の噴煙を上げる平成新山、東は万葉集にうたわれた有明海、西は夕日が映え東シナ海に注ぐ橘湾、北側にはムツゴロウが遊ぶ干潟の諫早湾、四方を海に囲まれた自然豊かな地域です。

四季を彩るお山雲仙は日本初の国立公園に指定（１９３４年）以来オレンジ色のおしゃれなホテルが建ち並び、今も標高７５０ｍのハイランドリゾートとして国内外の観光客のメッカです。

「島原半島うみやま街道」のお楽しみコースの一部をご紹介します。

**1、潮風と入日（いりひ）が癒すロマン街道**

国道５７号と２５１号が交差する愛野展望台、眼下に広がる橘湾・東シナ海の落日、左手には雲仙連峰の３０万年の間に４５０ｍ沈下（千々石断層）し、今も息づく山の偉容は脅威と感動です。

**2、人と火山が共生するジオパーク街道**

島原半島は約４３０万年前、海底火山が隆起した美しい景観と豊かな大地です。温泉、湧水、先端技術の防災など自然と共生する人々の生活の知恵に恵まれた日本最初の「ユネスコ世界ジオパーク」を体験ください。

**3、祈りと幸せをつぐむ巡礼街道**

「東の高野山、西の雲仙岳」の修験道場は、五穀豊穣、無病息災、幸せになりたい、健康で平和でありたい。そのための庶民信仰の観世音巡礼、また為政者との戦いを乗り越えた「世界遺産・原城跡」。キリシタンの足跡を辿り、祈りを捧げる旅の聖地でもあります。

**4、今も息づく雲仙トレッキングコース**

国道５７号と３８９号が交差する雲仙温泉街より、高齢者は白雲の池キャンプ地周遊を、その足で昔外国人避暑客に「サンセット・ヒル」と呼ばれた絹笠山へ登り、山頂から雲仙の山々と眼下の四海をお楽しみください。また、若者たちは四季折々の雲仙五岳のトレッキングに挑戦してみてはいかがでしょうか。

（島原半島うみやま街道・推進協議会会長、宮田　隆）

# 二　ぐるっと一周、島原ロマン街道

## 1　潮風と落日（いりひ）が癒すロマン街道

起点・愛野展望台＝千々石海岸―小浜温泉―口之津―原城跡―島原城下町―鍋島邸

## 2　人と火山が共生する「息づく大地の旅」ジオパーク街道

① 島原半島の成り立ちを探る旅コース
② 島原大変を訪れるコース
③ 平成噴火をたどるコース

## 3　祈りと幸せをつぐむ島原半島　巡礼街道

① キリシタン史跡のコース
② 観世音３３霊場巡礼コース

島原風景街道は豊かな海と山、荒々しい大地の動きと温泉などの癒しの場、四季折々に咲く花々など、ぐるっと島原半島を回り、歴史のロマンを感じ、雲仙の山に登ると、日本最初の国立公園を満喫できる。

「電光型の山道」を、小浜温泉から雲仙温泉へ登る。作家・野上弥生子は、まだキザギザだった国道５７号（雲仙道路）をドライブしている。

「私たちの道の曲折で視野の底には、道の曲折で右になったり左にみえたりしながら、その壮麗な光景が絶えずあった」。車の窓から見下ろすと「貯土、井戸の縁から覗き見するように―おそろしく深い、おそろしく大きい井戸。そうして何と素晴らしく美しい、-湾、岬、輝く海、夕陽、島―」

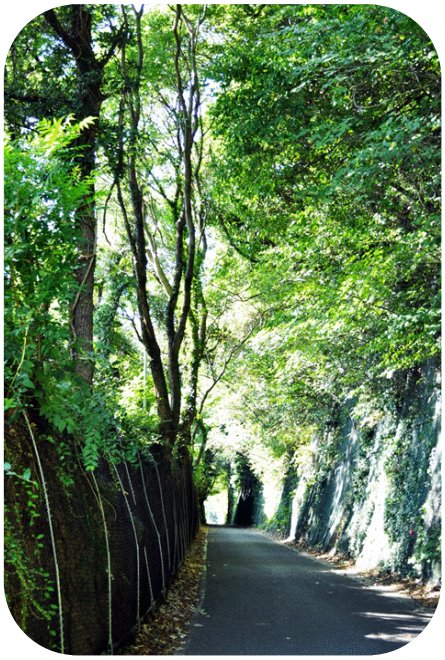
雲仙・島原の自然の美しさを、野上弥生子は紀行「雲仙」の中で、こう表現している。

島原風景街道の「主たる道」は半島をぐるりと一周する国道２５１号と、半島を十文字にクロスする、東から西への国道５７号と北から南へ同３８９号、どの道も、ドライブコースとしては抜群の魅力を持っている。

### ○　マグマだまりの橘湾

諫早から国道５７号を走ると、同２５１号と交差する高台に、愛野展望台がある。目の下に橘湾（千々石湾）が緩やかな円を描いた海岸の縁の中に輝いて、遠く東シナ海、天草灘まで広がっている。

この展望所は太古、千々石火山の火口縁に当たり、橘湾はそのカルデラとみられている。橘湾の波静かな青い海面の下は「マグマ」が溜まり、雲仙岳を噴火させる火山エネルギーの源泉となる海なのだ。目を山に向けると、東の方角に、山が急斜面で落ち込んでいるのが見える。島原半島を二つに割る千々石断層で、その地下の割れ目から、マグマが上昇、雲仙岳の噴火を引き起こす。島原半島全体がこうした火山活動で形成された。島の南端から噴き上げた溶岩で「島」が出来、やがて拡大して本土につながり半島になった。平成に入っての普賢岳の爆発も平成新山を創ったのも、このまま「マグマ溜まり」から供給されたマグマと溶岩が吹き出したものなのだ。


緑のトンネル（小浜鉄道跡）

## ○ 鉄道跡の緑のトンネル

ガラス張りの愛野展望所から崖の縁を走り下って橘神社に詣でる。日露戦争で戦死した軍神・橘周太中佐を祀った神社で、遣欧少年使節のメンバー千々石ミゲルの出身地。彼は後に棄教した、とされる。平成１６年、ミゲル夫妻の墓石（諫早市）が発見され、話題となった。

桜の名所、ギネス世界一の門松（高さ約１４ｍ）、桜の開花と合わせて、たいまつを手に手に鎧武者たちが登場、戦国の合戦を再現する行事（観桜火宴（かんおうかえん））などで知られる。

小浜温泉に向けて、ジョガーやランニングに最適な道がある。かつての小浜鉄道の線路（大正１２年開通）跡で、見事な石造りのトンネルが３本、ゆっくりしたカーブを持っていて、ひんやりした空気が心地よい。また、かつての切通し（３か所）は樹木が生いかぶさり「緑のトンネル」となっている。「春、新芽時が最高」という。

正月の門松を飾る橘神社

## ○ 熱く長い足湯、小浜温泉

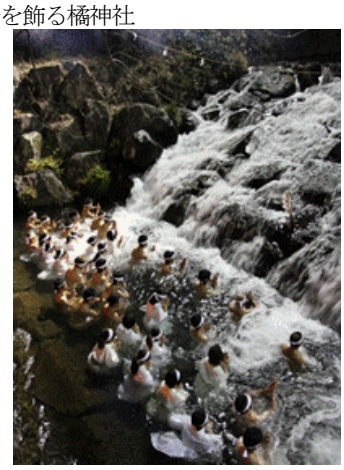
小浜温泉に入る。電柱の地中化ですっきりした海辺の道と旅館街、立ち上る幾筋もの湯煙。マグマに最初に熱せられた地下水が湧き出ているから、熱くたぎった温泉で、「ぬる湯」好きにはとても入れない。長崎大学に務めた歌人・斉藤茂吉が愛した浜べの湯だ。かつては長崎からの外国人が湯治にやってきた。

海水浴場沿いに、日本１長い（１０５ｍ）という「足湯」場が造られている。湯煙が潮の香りを漂わせながら白く立ちこめる源泉から引かれた熱湯が足湯場に流れ、家族ずれや若いカップルがはしゃぐ声が聞こえてくる。

島原城から移設された門（田町門）を持つ小浜歴史資料館は、小浜温泉の管理を島原藩から任された「本多湯太夫邸」と併設（展示館）されている。築１７０年で大きな黒ずんだ柱、梁がその財力を物語る。本多家は代々、小浜の街の発展の為、海岸埋め立て、鉄道敷設などに尽力している。資料館内には武士の岩風呂や煙を噴き上げる温泉の源泉もある。

紫の花を付ける約７５０本ものジャカランタ並木を通って、小浜温泉の南の金浜石橋付近へ。山を見上げると、金浜断層が走り、布津断層に繋がっている、と説明板にある。北の千々石断層と対になって島原半島を二つに割る地溝帯を作っている。

小浜温泉の 105m ある足湯


橘神社の寒中の禊

観桜火宴（橘神社　雲仙市千々石町）

## ○ 外国人にも愛された美しい海岸

小浜温泉から南へ下る。亜熱帯植物が自生する国崎半島自然公園を回って、加津佐町に入る。ここから美しい海岸が続く。野田浜、前浜海水浴場、口之津に入ると白浜海水浴場。白浜は、「陽にさらされる貝殻の海岸を白く美装せる様見事なり」（口之津鉄道案内）。雲仙のお山と並んで外国人に愛された海岸で、避暑に訪れた外国人家族が大勢、ビーチパラソルを並べて海水浴を楽しんだ。

口之津は南蛮船渡来の地であり、キリスト教布教の基地でもあった。ここで日本布教の戦略が練られ、宣教師を育てる神学校・加津佐コレジョ（大学）、セミナリオ（初、中等校）跡、切支丹墓地も残っている。最高学府のコレジオ跡もある。有馬晴信に洗礼を授けた巡察師・ブリヤニーノが設立したとされている。

口之津は島原半島の最先端で、早崎の岬に抱かれた天然の港。今は天草へのフェリーが往復している。天草島とは5㎞ほど、指呼の間だ。「架橋早期実現」の大看板が港に立っている。

有明海の出口で潮の干満による早崎瀬戸の渦潮が見られる。「重ぐるしく鳴動せる様、頭髪さかしまに肌にアワを生ずるが如き壮観」（鉄道案内）。岬を一周する九州オルレ南島原コースも用意されている。沖合は、イルカウオッチングが若い人の人気を呼んでいる。

国道251号を北上する。ところどころ、起伏があるのに気付く。布津断層と推定されている。かつてキリシタン大名・有馬晴信が治めた本拠地、南有馬・北有馬に入る。本城・日野江城、支城・原城跡、神学校・セミナリオ跡など遺跡が豊富だ。有馬キリシタン遺産記念館で詳しく説明してもらえる。

ジャカランダ並木の海岸通り（小浜温泉）

小浜歴史資料館（正門は島原城から移設）

## ○ 島原の赤パン列車

三井三池の石炭積出港として栄えた口之津から島原へ、当時、島原、さらに諫早駅までの半島半周を島原鉄道が走っていた。諫早でJR長崎線に乗り換える。さらに遠く博多や小倉、門司への列車が走っていた。旧口之津鉄道、後に合併して島原鉄道になったが、平成20年、島原外港までの区間は廃線になった。人口減もあるし、噴火災害、洪水被害もあった。今は国道251号のバスしかない。わずかに、口之津港近くに「島原鉄道」と書いた、かつての駅看板の建物あたりに廃線の名残りをとどめる線路が雑草の中に埋もれている。

島原鉄道は熊本や大牟田港と連絡するフェリーや高速船が出入りする島原外港駅～諫早間20駅だ。正面の顔模様がパンツはいているようで「赤パン」と若者があだ名をつけた列車や、黄色の一～二両列車が雲仙の緑の雲仙岳と青い有明海の間を元気にコトコトと走っている。途中、海に日本で最も近い駅（三会駅）などもある。

## ○ 原城から見えるリンサムニュームの白洲

原城跡の大看板が国道から見える。その向こうに段丘上の丘陵があり、そこが原城跡。島原の乱で、キリスト教の十字架の旗を押し立て立て籠もり、3万7000人が皆殺しされた悲劇の城跡だ。

本丸高台のすぐ近くの海に「白洲」呼ばれる瀬が現れる。旧暦3月と8月の最干潮時に、姿を現す。東西約1000mの細長い浅瀬、白い洲で、真っ白に見えることから「真砂」と呼ばれる。「リンサムニューム」（紅藻類）という海藻が、死んで石となって堆積しているのだという。世界でもイギリス海岸とインド洋とここの3カ所しか見られない。「原城の死者が，生者に弔われることなく、死者自身が弔わざるを得な

リンサムニューム（後方は原城跡）

かったということと、どこか白い石は詩的に似通っているのだろうか」と司馬遼太郎氏は「街道を行く」（島原・天草の諸道）と思いを広げている。

## ○ 高速道と観光道路の先がけ

火砕流、土石流の被害の傷跡が残る深江を経て、島原市に入った。遠くに島原城が姿を現す。島原市で国道２５１号に分かれ国道５７号（島原道路）で雲仙温泉を目指して登り始める。この島原道路と小浜までの雲仙道路は日本高速道路（名神、東名）建設の実験道路だった。野上弥生子が「電光型の山道」と書いた道路を、当時の道路公団が一般有料道路に改築、緩やかな曲線のクロソイド曲線に造り直し、アメリカの大型土木機械を導入して、機械力ではじめて造った「土木遺産」ともいえる道路だ。

国立公園を横切る道路らしく、野上が紀行文に書いたように、車から海を見下ろし、山を見上げ、山の花々を楽しむ「景観を大切にした道路」。登り切った所が、雲仙ゴルフ場、その前の道路は、登りと下りの間に自然林を残して中間帯を造るなど景観に細かい配慮も見せている。別府湯の町を売り出した油屋熊八は早くから、国立公園を繋ぐ長崎・島原～阿蘇～久住～別府の九州横断観光道路を提唱。国道５７号の雲仙道路と島原道路はその「走り」でもある。

## ○ 島原街道１００km

島原城を起点に、島原半島をぐるっと１周する道路は島原街道、あるいは島原往還と呼ばれ約１００ｋｍの道のりだった。この道を使って、伊能忠敬は半年をかけて測量に回ったし、長崎に向かう坂本竜馬や吉田松陰らが通っている。がまだすドーム近くには巨大な竜馬像が立っている。勝海舟と共に長崎に向かい、下関での外国艦船と長州との砲撃戦を中止させようと長崎で交渉したが、失敗している。松陰はロシア艦隊を見るため（一説には密航のため）、島原を経て長崎へ向かった。島原の立ち寄り地には説明板がある。

藩主の参勤交代は島原街道から長崎街道、あるいは有明海を船で横断して江戸に向かう２コースがあった。

島原湾のイルカウオッチング

南蛮船来航の碑が立つ口之津（南島原市口之津）

## ○ 雲仙の原生沼と花々

雲仙温泉には「原生沼」近くにテニスコートがあり、天然記念物のミズゴケ湿原でモウセンゴケ、カキツバタ、レンゲツツジなどが生息している。ゴルフ場に沿って雲仙の花・ミヤマキリシマの群生が、また仁田峠は５月ごろ、山がミヤマキリシマのピンクに染まる。夏はヤマボウシ、冬は霧氷。高岩岳への登山途中には宝原（ほうばる）ツツジ公園がある。

## ○ 雲仙ビードロ美術館（雲仙市小浜町雲仙）

長崎は日本のガラスづくりの発祥地で、九州随一のアンティークガラス約３００点を展示、巨匠リベンスキーの作品も。ガラスづくり体験工房もある。

電話＝０９５７・７３・３１３３。

## ○ キリシタン墓碑

島原半島にはキリシタン信者の墓碑が約１３０、点在している。かまぼこ型や切妻型など様々な形式を持っている。ほとんどが、無名碑で半島南部に多い。

雲仙ビードロ美術館

キリシタン墓碑（島原城内）

## コラム　小さな旅①
### 自然と一体となる、ひと時

橘湾に面した小浜温泉から国道57号を走り、細い脇道の坂を登ると、ショップ・喫茶「刈水庵（かりみずあん）」がある。人が減り、空き家対策として築90年の古民家を改装。窓からは生い茂る木々と橘湾が見え、室内にいるのに外の風を感じさせる。「イタリアで勉強したデザインの力で地域を盛り上げて行く活動に興味があり、神奈川から移住した」（店長）という。

一階のショップには国内外の工芸作品、世界の雑貨などが展示されている。二階の喫茶室は、窓から差し込む光と和の照明が、古民家に光と影の豊かな空間を醸し出している。コーヒーやハーブティーのさわやかな香りとやさしい味の手造りクッキー。ゆったりとした時間を過ごすことが出来た。自然と一体となる心地よさと穏やかな時間を味わいに、あなたも一度、訪れてみませんか。（牧圭子=道守長崎会議代表世話人）

刈水庵
長崎県雲仙市小浜町北本町
１０１１番地。火、木定休日
℡０９５７-７４-２０１０）

ショップでは国内外の工芸品

築90年の古民家・刈水庵

## コラム　小さな旅②　牛やロバ、ヤギのお出迎え

「パインテールファーム」へは小浜温泉から諏訪の池に登る途中の山道に入る。突然、視界が広がり、牧場が現れる。使われなくなった小学校が牛舎。乳牛を育てながら、搾りたての牛乳で、チーズを作っている。オリジナルナチュラルチーズ「雲仙フロマージュ」は、濃厚な味わいと深い香り。オーナーが独学で、十数年の試作を重ねて作り上げた。「クリームチーズ」「熟成チーズ」「白カビチーズ」デザートチーズ」の四種類に「オリーブ発酵バター」「作り立てチーズ」もある。

牧場内にチーズのやわらかい香りが漂うカフェがある。オーナー手造りの石窯を使い、奥様が考案したレシピで焼くピザ。さっきまでピザを頬張っていた子供がヤギに草を食べさせている。ヤギもうれしい時にはしっぽを振ってこたえることを初めて知った(圭)

パインテールファーム　長崎県雲仙市小浜町木場１９７０番地。
土、日のみ営業　℡　０９５７-７４-５６７４

松尾さんご夫妻（右の二人）とスタッフ

乳牛がのんびり寝そべるパインテールファーム

# 三　火山と共生のジオパーク街道

## 1　息づく大地の旅

ユネスコ世界ジオパークに認定

半島を引き裂く地溝帯、そこから吹き出すマグマ

**島原半島の成り立ちコース・**

起点＝　早崎半島―女島―両子岩―国崎半島―棚畑展望台―花房展望台―原城跡―龍石海岸

島原半島の地形は、ボクシングのグローブに例える人がおり、人間の胃の形に似ているという人もいる。中央に複成火山群の雲仙岳「三岳五峰」の山々がそびえ、太古以来の火山活動がこの半島を創ってきた。平成2年噴火の大火砕流、土石流が発生、巨大な溶岩ドームを帽子のようにかぶる「平成新山」（1482・7m）が誕生した。

西は円形の橘湾を抱くように、東は有明海に挟まれた半島で、東西約24km、南北約32km。海の向こうに天草、阿蘇など熊本の山々。半島南端の口之津からは早崎海峡を挟んで天草島が指呼の間。フェリーが頻繁に行き来する。人々は、この海峡を一跨ぎする架橋を長く願ってきたが、実現はまだまだ遠そうだ。

**○　海と山の、ジオの風景街道**

島原風景街道は、海と島と豊かな歴史景観を楽しむ「ぐるっと島原半島周遊」（138・3km）と中央山岳部の火山活動「息づく大地」の活動を、間近に、現地をじかに歩き、ジオサイトを観察できる「ジオの風景街道」でもある。

島原半島・雲仙の豊かな自然、雄大な景観からわが国、国立公園の第1号（昭和7年）。雲仙岳の189年ぶり「平成噴火」をきっかけに、平成20年に日本ジオパーク、翌21年には日本第一号の世界ジオパークに認定されている。

島原半島ユネスコ世界ジオパークは雲仙岳の火山活動を中心に、生きた大地の野外博物館であり、公園だ。

仁田峠から見る平成新山と野口弥生子の歌碑

例えば、雲仙仁田峠第2展望所に立てば足元に波静かな有明海が広がり、見上げれば、すぐそこに平成新山の1億㎥とも言われる巨大な溶岩ドームが不気味に迫ってくる。仁田峠第二展望台に「雲仙で　阿蘇の煙を　見てかえり」の歌碑があるように雲のはるかに阿蘇五岳が姿を見せ、天草島がすぐそこにある。眺望は雄大だ。

作家・野上弥生子は雲仙の景観を愛した。有明海と反対側の千々石湾（橘湾）側から雲仙に登った弥生子は「千々石湾の湖めいた碧面、その後ろに洋々と広がった天草灘、島はやがて空から水の裏側の軌道へ轉廻しようとしてゐる太陽の下で、海といふよりただ無数の閃めく斑點に浮かんだ薫銀の帯であった」と大きな景観を描写している。確かに、橘湾の向こうに沈む太陽は大きく美しい。小浜温泉から、時に、「だるま夕陽」も見られる。

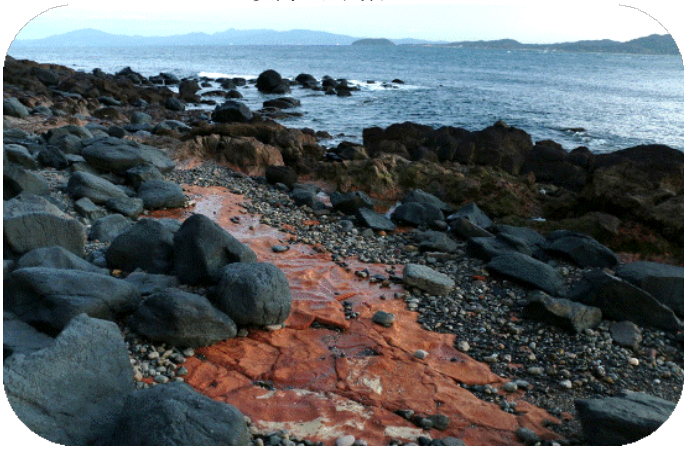
**○　島原半島はじまりの地**

（早崎半島～両子岩～国崎半島～棚畑展望台）

島原半島は一つの「火山島」だった。約430万年前、海底火山が噴火、溶岩と火山灰を噴き上げ、その頂上が海面に姿を現した。それがフェリーが出入りする口之津の早崎半島で、玄武岩の露頭が見られる。ここが島原半島始まりの地だ。玄武岩は鉄分を多く含み、それが風化して赤い土を作った。赤いジャガイモ畑が広がるのはそのためだ。150年前の噴火で出来た緩やかな斜面を生かした、海端から登ってくる「棚畑」は棚田と同様に、島原半島のジオの景観だ。比較的、粘り気の弱いマグマを噴出する火山が勾配の緩い地形を創ったとみられる。普賢岳や平成新山オ粘り気の強い溶岩とは対照的だ。

海岸沿いを北へ、奇岩・両子岩が半島誕生の物語のランドマークのようにポコリと立って、面白い。

女島の玄武岩



早崎半島の玄武岩

夕陽に映える両子岩（安山岩）

## ○　５０万年前から雲仙の山々が誕生

（平成新山～普賢岳～妙見岳～国見岳）

以来、火山活動が続き、島を大きくしてきた。１５０万～２００万年前、その北の国崎半島に火山が現れた。こちらは安山岩だ。さらに約５０万年前からは島原地溝帯の南側に高岩山（標高８８１ｍ）が噴火、以後、次々と地溝中央部から山が生まれて行く。雲仙岳（１３５９ｍ）が出来、火山活動は一層、激しくなり約４０万年前には、流れ出た土砂（火砕流などの火山堆積土）や溶岩が流れ下って海を埋め、九州本土と繋がって、島から半島となった。

桜島が大正年間の爆発で溶岩が流れ出て、大隅半島と陸続きになったが、それとは比較にならないほど大規模な爆発で吹き出た火山灰土や火砕流に運ばれた土石が海を埋めるように流れ出て、半島北部の比較的平坦地を創り、諫早市と半島を陸続きにしたのだった。

現在、拡幅と高架の自動車道路を建設中（森山拡幅）の国道５７号を走ると、遠くまで干拓の畑が広がる。干潟となった浅い海を利用して約７００年前から干拓が始まっていた諫早干拓が、湾口の締切りの今日まで続いて、穀倉地帯となっている。諫早湾を締め切っている潮受堤防（７０５０ｍ）、その直線道路を多くの車が走っている。

## ○長い斜線を描く千々石断層

（千々和展望台～金浜断層～布津断層）

島原半島は二つに割れている。橘湾を望む愛野・千々石展望台に立って、東の雲仙岳方面を見ると、半島を南北に引っ張って割る（正断層）千々石断層の沈下斜面が見える。半島の中央部が激しく沈下して、北の千々石断層と南の布津断層・金浜断層の間は３０万年前ごろから沈下して行き雲仙地溝帯を形成した。今でも１・５㎜（年間）の沈下が続き、３０万年で４５０ｍも沈んでいることになる、という。

この地溝帯は九州島を南北に２分する別府・島原地溝帯の一部で、沈下を起こした断層をじかに観察が出来る、全国でもまれな「ジオサイト」だ。

展望台から海岸への下り道は断層の斜面で、下り終えた所の、美しく弧を描く千々石海岸から、千々石少年自然の家がある山に登ると、千々石断層が長く緩やかな斜線を引いて海に下り、沈下した断面をはっきり見ることが出来る。

南側の断層は小浜温泉の南から金浜断層が東に向かって高岩山へ走り、高岩山から布津断層が有明海に向かって走っている。国道２５１号を口之津から原城に向かって北上すると、道は丘陵を上下して走る。断層が造りだした起伏、と見られている。

島原の乱の主舞台・原城跡の丘陵は９万年前の阿蘇大爆発で九州を被った大火砕流の痕跡。熊本側から火砕流が島原半島に押し寄せて来たのだ。原城跡から島原市に向かう海岸沿いに「龍

有明海側の深江断層、布津断層

千々石展望台から眺める雲仙岳、千々石断層、橘湾

石海岸」に幾重もの地層の重なりを見せている。雲仙火山が活動を始めた約５０万年前の地層から、その後の活動を今に伝える幾つもの地層の重なりを見ることが出来る。火山活動の履歴書だ。

**○次々と溶岩ドーム形成**

雲仙岳の噴火活動は、特別な性格を持っている。４３０万年以上の半島南部の火山噴火で出来た島原の火山島は、その北部と東部で５０万年前に激しく火山活動を始めた。南部の火山と違って、粘り気の強いマグマ（デイサイト質）を押し出すように噴出、溶岩ドームを次々と造って成長し、現在の普賢岳（１３５９・３ｍ）妙見岳（１３３３ｍ）国見岳（１３４７ｍ）などを造山、平成２年、普賢岳火口で始まった噴火で溶岩ドームが幾重にも重なり、普賢岳を越える「平成新山」（１４８２・７ｍ）にまで成長しており、今も頂上に巨大な溶岩ドームが帽子かぶるように乗っている。

島原半島は今も、正断層が北に２cm、南へ３cmそれぞれ引っ張られる形で割れて地溝帯を深くしている。

島原地溝内の割れ目から次々とマグマの噴出、噴火が起こり、普賢岳など雲仙の山々を立ち上げて行った。この地溝帯は別府・島原地溝帯につながり、九州を２分し阿蘇、久住などの火山帯を誕生させた。それによって雲仙～阿蘇～久住～別府の九州最大の温泉地帯・火山帯観光地をつくっている

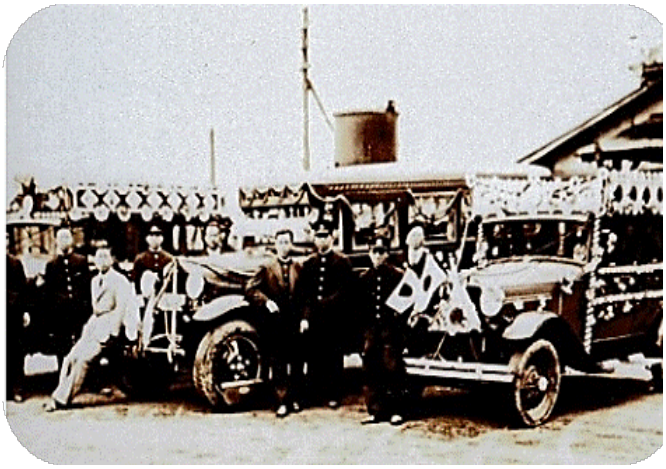
50 万年前の地層が重なる龍石海岸

千々石少年自然の家から眺める千々石断層

**参考　ジオサイト**

ジオパークの見どころはその学術的価値によって３つに分けられる。「地質サイト」は地質学的価値を持つサイト、「自然サイト」は動植物や自然環境、「文化サイト」は歴史文化的な価値を持つサイトだ。

次々に形成される溶岩ドーム（平成新山）



雲仙国立公園選定の祝賀バス（昭和７年）

# 2　雲仙のダイナミックな造山活動

## 巨人「みそ五郎」の伝説、今も恐怖の溶岩ドームをかぶる平成新山

### ○「みそ五郎」伝説

南島原市西有家町では、高さ４ｍもあろうかと思われる「大男」が毎年１１月３～４日町内を台車に乗って練り歩く。大男の名を「みそ五郎」と呼ぶ。南島原市役所前に、街のシンボルとしてその巨大な像が座っている。

島原半島と天草には、「みそ五郎」の巨人伝説がある。朝起きると雲仙岳に腰を下ろし、有明海で顔を洗った。味噌好きの大男。そこに暮らす人々を手伝いながら、駄賃に好物の味噌をもらい、島原の地形を造って行く。地形を造るのは雲仙岳で、「みそ五郎」は雲仙岳の化身。雲仙火山が噴火によって、次々に山を造って行く創造主であり、温泉や湧水などの恵みを与える。

高岩山に生まれ育った「みそ五郎」は人が良く、力持ち。今日も、農家の手伝いに出かけ、クワを振り上げた拍子に、しりもちをついた。土は有明海に飛んでゆき、落ちて「湯島」になった。しりもちの穴は雲仙の池となった。

みそ五郎まつり

### ○　４３０万年前から噴火活動

島原半島は一つの「火山島」だった。約４３０万年前、海底火山が噴火、溶岩と火山灰を噴き上げ、以来、火山活動が続き、島を大きくしてきた。さらに約５０万年前からは雲仙岳(雲仙火山)が出来、火山活動は一層、激しくなり約４０万年前には、火砕流が運んだ火山堆積土と溶岩が流れ下って海を埋め、九州本土と繋がって、半島となった。桜島が大正年間の爆発で、大隅半島と陸続きになったが、比較にならないほど大規模な爆発と溶岩だったのだろう。

島原半島と本土とのつながった部分は、諫早干拓が３００年前から行われてきて平成になって中央干拓地（５８１ｈａ）と小江干拓地（９１ｈａ）が造成され、福岡ヤフードーム１１６個分の面積を干拓、そのための潮受堤防(約７ｋｍ)が築堤された。干拓見学のための資料館や「ムツゴロウ水族館」がある。(干拓の里電話：０９５７―２４―６７７６)

島原半島は二つに割れる。橘湾を望む千々石展望台に立って、東を展望すると、半島を南北に割る千々石断層の斜面が見える。半島を南北に引き裂くこの断層で約３０万年間で最大４５０ｍずれ、南の布津断層・金浜断層の間の中央部が激しく沈下して、雲仙地溝帯を形成した。現在も北へ２㎝、南に３㎝引っ張られ、年間１～３㎝沈下。地溝帯の深さは最大１０００ｍにも及ぶ。その大半が火山噴出土で埋まっていると考えられている。

地溝内から次々とマグマが吹き出て、火山噴火が起こり、普賢岳など雲仙の山々を立ち上げて行った。この地溝帯は九州本土、中央部の阿蘇、久住などの火山帯を誕生させた九州を２分する地溝帯(別府島原地溝帯)に繋がって行く。みそ五郎の仕業かも知れない。

### ○　溶岩ドーム形成と崩落の繰り返し

雲仙の噴火活動は、特別な性格を持っていた。平成新山の頂上は斜面に溶岩ドームをかぶっている。少しずつずれ動いているのだという。いつか崩れ落ちるのではないかと、麓の人々を心配させており、厳重な監視体制下にある。

同じように、雲仙岳はこれまでも粘性の高いマグマが噴出し、溶岩ドームを造り、それが火山性地震などで崩れ落ちて、急峻な雲仙岳を形作ってきた。平成新山は、噴火で１３も溶岩ドームを重ね、普賢岳より約１２４ｍも高く成長、現在は普賢岳を越えて最高峰(１４８３ｍ)となっている。マグマの溶岩ドーム形成～地震による崩壊、火砕流発生を繰返す火山活動なのだ。溶岩は比較的堅く、富士山型のように流れ下ら

ず、秀麗な山形はならず、火口付近に溶岩ドームを重ねて、ゴツゴツした岩山を造って行く。

平成２年（１９９０）１１月１７日に始まった噴火は、最初は水蒸気爆発で、本格的噴火が始まったのは平成３年２月から。やがて溶岩ドームが成長をはじめ、１日最大４０万㎥に達した。噴出口を１３回も変え、平らな地点では円形のドームに、斜面では「ローブ」と呼ばれる舌状になった。ドームは後に続いて湧き上がる溶岩と重なり合って大きく成長、巨大化していった。溶岩の噴出は３年９カ月続き、仁田峠に登る途中の第２展望所から見える東斜面の溶岩ドームは「第１１Ｂローブ」と呼ばれている。

我々が見上げる雲仙岳、平成新山は太古からそのような活動の繰り返しで、造山運動を続けている。激しく「息づく大地」が目の前で展開する―島原半島が世界ジオパークに認定された（平成２１年）第１の理由だ。

大地の成り立ち、火山災害と温泉や湧水などの恵み、火山特有の大景観、火山と共生する人々。２０を超える雲仙岳の山々、さらには仁田峠など山からの波静かな有明海と、島々。その大地の動きと自然、独特の景観が日本で初めての国立公園の指定された理由でもあるのだろう。

平成新山頂上の火山岩尖と溶岩ドーム

## ○　溶岩ドームへ大接近

島原半島ジオパークの普賢岳、平成新山など活発な火山活動が続く中央部の雲仙地区。島原半島ジオパーク面積の３０％近い面積を占める。

雲仙「ジオハイク」のハイライトは、山頂の溶岩ドームへの「大接近」コースだ。仁田峠からロープウエイで妙見岳に登る。初夏ならロープウエイから山をピンクに染めるミヤマキリシマの群生、ゴルフ場横の池の原群落（国天然記念物）から仁田峠に登る（約４０分）のも魅力的なコースだ。秋なら一面の紅葉、冬は山頂が白い霧氷だ。妙見神社から左手に妙見カルデラの尾根登山道を行く。吹越分かれに来ると眼前に普賢岳、そのむこうに平成新山が現れる。次いで国見分かれ。国見岳山頂へは岩場が続く厳しい登り。

雲仙地獄

妙見岳と国見岳は４万年前から噴火活動を続けた妙見火山が、２万年前、大崩壊を起こした崩落壁の一部で、普賢岳はその崩落によって出来た「くぼ地」から噴火、溶岩ドームを次々に造り、重なって高くなり、現在の普賢岳を形作った。妙見・国見岳夫婦の子供が普賢岳、新しく誕生した孫が平成新山となる。

国見分かれを通り過ぎると、新登山口（鬼人谷口）から普賢岳山頂を目指す。健脚組は紅葉茶屋から山頂へ直進登山路がある。新登山道から「西の風穴」「北の風穴」を通って、「鳩穴分れ」へ。ここは有明海と妙見岳の絶景ポイント。かつての立岩峰溶岩ドームでもある。

普賢岳の頂上は標高１３５９ｍ。普賢岳の目の前に、雲仙１の高さを譲った平成新山がある。岩石を盛り上げたような固結溶岩が重なり盛り上がった山容で、頂上に三角形の帽子を乗せたような「火山岩尖」が見える。仁田峠からは、今にも崩れ落ちそうな溶岩ドームの姿は見えず、不気味だが、「平成」の名にふさわしく穏やかに静まり返っていた。

行基が開いた満明寺

## ○　地獄めぐり―普賢岳を下山、仁田峠から雲仙温泉街へ。

雲仙温泉と言えば地獄。熱湯をかぶせ、あるいは吊るして切支丹教徒を拷問にかけ

文字通り「地獄絵巻」が繰り広げられた場所。白い煙が吹き出し、音をたてる、おどろおどろしい地獄景観だ。雲仙山岳はかつての修験道の霊地でもあり、地獄、極楽を具体的にイメージさせる格好の舞台でもあった。強い硫黄の臭い。一面、湯煙に包まれ、奇岩が白く不気味に染まっている。

雲仙温泉は硫黄を含む強酸性の火山ガスと地下水が混ざって湧出している。山頂にあるため、地獄では、地下水が乏しく、火山ガスが直接地表に噴出しているのだという。ガスが最も吹き出ているのが「大叫喚地獄」。熱湯は１００度を超え、罪人が落ちると大きな悲鳴を上げてしまうほど、ということからこの名がある。

隣は邪見地獄。この湯を飲めば嫉妬心が消えるとか。清七地獄は長崎の切支丹・清七が処刑された日に湧き出したという由来がある。「お糸地獄」も同じ信徒のお糸が殉教した地獄だ。歩道の途中、大きな十字架を見た。１６２７年から５年間、沸き立つ熱湯をかけるなど地獄で責められ、殉教した宣教師や信徒の名が刻まれている道（国道５７号）を挟んで、雲仙開山の行基が開いた満明寺の横に「賽の河原」もある。冥土へ渡る三途の川。子供が石を積み上げる河原で、それを慰める地獄地蔵も立っている。地獄極楽の諭しの教材、舞台になった噴気帯である。

## ○　ロッキーヒル、巨石をいただく高岩岳

圧倒的な存在感のある普賢岳や平成新山に比べれば、島原・雲仙での最初に噴火し出来た山、高岩岳（標高８８１ｍ）への登山道は穏やかだ。雲仙温泉街から自然歩道を辿って、２０分ほどで小地獄温泉に着く。大型ホテルが並ぶ雲仙温泉街から一転、ひなびた山の温泉地。吉田松陰もこの湯で長旅の疲れを癒した。さらに２０分、ミヤマキリシマが群生する宝原（ほうばる）園地に出る。展望台から見るピンクの花園は多くの観光客をひきつける。

高岩山頂の帆柱山

さらに登る。高岩権現神社への鳥居の参道をくぐって登こと４０分。その名の通り巨石だらけの高岩山の山頂に到着。これらの大石は「みそ五郎」伝説にまつわる物が多い。なかに帆柱石がある。巨大な、天を突くようにたっている。事実、南西側は、溶結凝灰岩が冷えて固まるとき、縦に長い帆柱のような柱状節理の断崖となっている。保養に訪れた外国人が「ロッキーヒル」とこの山を名付けたのも頷ける。

高岩山は雲仙地溝帯の南側、金浜断層と布津断層のつなぎ目で、雲仙地溝帯の火山活動の最初の造山運動によって出来た。みそ五郎伝説を体現する山と言ってよいだろう。

## ○　雲仙お山の情報館（雲仙市小浜町雲仙）

本館と別館があり、スタッフが常駐して、雲仙の火山、温泉、歴史、花や野鳥、昆虫など雲仙の自然について案内情報提供してくれる。登山ガイド・地図、案内や説明パンフレットも豊富で、英語、

雲仙お山の情報館

雲仙地獄の拷問図

カトリック殉教記念碑（雲仙地獄）

中国語、韓国語の登山ガイドブックも用意されている。
また、観察会や、登山会、バスツアーなども行っている。夏休みは家族で参加できる催事も。別館では避暑地として外国人が長期滞在していた時代の写真やパネルを見ることが出来る。
電話＝０９５７・７３・３６３６．毎週木曜日は休館。

○ **田代原トレイルセンター**（雲仙市千々石町、雲仙温泉から車で約１５分）
島原半島ジオパーク紹介コーナーがある。初夏のミヤマキリシマ（池の原公園）、ヤマツツジから、初夏のヤマボウシまで色とりどりの花、秋は紅葉を楽しむ拠点、また、九千部、吾妻岳登山の起点として利用されている。「ＮＰＯ奥雲仙の自然を守る会」が草刈りなど保全活動を続けている。キャンプ場も隣接。
電話＝０９５７・７８・００４１．土曜休館。

○ **エコ・パーク論所原**（南島原市北有馬）
国道３８９号「諏訪の池」近く。キャンプ場、オートキャンプサイト、トイレなどの設備が完備。テントなどの貸し出しもしている。体験プログラムも各種用意されている。
電話＝０９５７・６５・７０５６．休館は１２月２９日～１月３日。

○ **雲仙諏訪の池ビジターセンター**（雲仙市小浜諏訪の池）
全国ため池１００選に選ばれた諏訪の池を中心とする自然を知り、楽しむことが出来る。天文観測ドームをもつ本館１階は、諏訪の池の水辺、水中の生き物をジオラマなどで紹介、２階は宇宙のしくみの解説。３階には九州最大の屈折式大型望遠鏡が備えられている。
電話＝０９５７・７６・５０１０．水曜日休館。

雲仙諏訪の池ビジターセンター

## 3　インフラストック・ツアー

### 予想がつかない巨大溶岩ドームの動き
### 噴火の生々しい現場と無人施工で造られた砂防施設

コース
**千本木展望所―平成新山ネイチャーセンター―国道５７号火砕流到達地点―旧大野木場小学校―砂防みらい館（無人施工記念碑）―土石流被災家屋保存公園（道の駅）―がまだすドーム**

雲仙仁田峠展望台に立つと、普賢岳頂上（平成新山）に巨大な「かさぶた」のように溶岩の塊が目に飛び込んでくる。ソフトバンク球団のホームグラウンド・ヤフオクドームの５３倍杯分の容積、と推定されている。
平成３年５月、最初の溶岩ドームが出現、約４年間で１３個のドームが確認されている。この溶岩の塊が崩落して火砕流が発生する。火砕流堆積物は１億７千万㎥にのぼり地盤は最大で１７０ｍ高くなったという。悲劇は平成３年６月３日の大火砕流で、消防団員や報道陣など４３人の命を奪った（定点・上木場農業研修所跡）。山頂に残っている溶岩ドームがいつ崩れ出すか予想はつかないため、ドーム周辺に監視カメラを設置、常時、観察を続けている。

○ **生の現場を―「砂防みらい館」**
もし、ドームが崩壊すれば、火砕流は約５分で麓の国道５７号に到達、７分で有明海に達すると推定されている。また、これまでの噴火によって、堆積している土砂が台風、集中豪雨などで流れ出て土石流が発生する恐れもある。
日々刻々、溶岩ドーム、火砕流、土石流の動きを監視する「監視所」が島原市・大野木場「砂防みらい館」４階にある。かつて土石流が頻発した水無川の右岸。４階建てなのは、避難所も兼ねているからだ。４階を訪ねると、普賢岳を真近に展望できる総ガラス張りの部屋にテレビモニター、望遠鏡などの観測機材がずらりと並んでいる。溶岩ドームの動きを常時監視し、異常が認められるとただちに現場の工事関係者に速

報される。溶岩ドームが大崩壊したら、わずか7分で有明海まで達すると予想されている。

地下1階、1階、3階がそれぞれ「火山を学ぶ」「災害を伝える」「災害と復興」をテーマに豊富な写真やパネル・解説図、資料が展示されて「生きている普賢岳」を説明してくれる。

## ○「無人施工」―インフラストック・ツアー

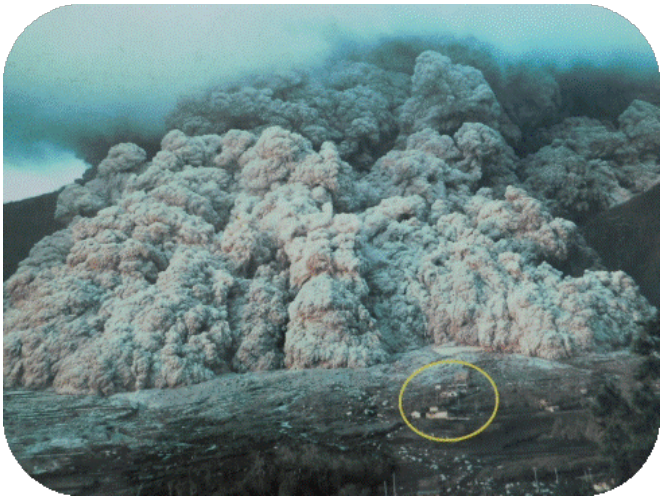
「生きている普賢岳と砂防工事」を生で観察したい、と希望する人のためにインフラストック・ツアーが用意されている。平成2年以来の噴火被害の現場と砂防ダムなど被害を最小限に抑える砂防施設を現地案内してくれる（問い合わせ雲仙復興事務所）。

災害復旧工事の現場で、注目されているのは、ダンプやブルトーザなど重機を危険地帯（警戒区域）の外から遠隔操作して働かす「無人施工」。雲仙の警戒区域内の工事を施工するため、この現場で生まれ、改良が進められた。これまでに水無川下流に、2号の砂防堰堤、スリットを備える3号堰堤などを造り上げている。

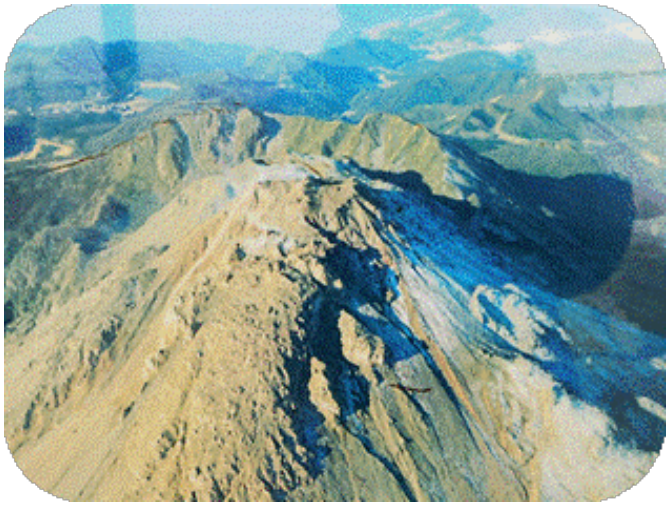
操作室は「みらい館」近くのプレハブ作業小屋。許可を得て中に入ると32台の映像パネルが並び、オペレーターが一人4画面のモニターを見ながら、1・3km先の重機を動かし、運転している。女性オペレーターの姿も。「現在は水無川の最上流で床固め施工中」（平成31年3月現在）と言う。火砕流、土石流が頻発する地帯は警戒区域に指定され、作業者の安全確保の為立ち入って工事は出来ない。火砕流などが時速100km以上の速さで流れ降りてくると、とても避難は間に合わない。しかし、下流の安全確保のために防災工事は急がなければならない。

危険を避けるため遠隔操作で防災工事を行う「無人施工」は雲仙火山活動のさなか、現場の必要性から開発された。堆積した土石を除去する単純作業から始まって、土石流の流れ下りを阻止する「砂防堰堤」築堤工事の施工、巨石の落下を食い止めるスリット据え付けにまで進歩した。「砂防みらい館」付近から、運転者なし、リモコンでブルドーザやバックホウなどの重機が動き回る様子を遠くに見ることが出来る。開発当初、米国・NASA（航空宇宙局）の技術者が見学に来るほど注目された。

雲仙発のこの技術は、北海道・有珠山、桜島の火山活動、紀伊半島での豪雨による自然ダム、最近では熊本地震で50万$m^3$もの斜面崩壊を起こし、阿蘇大橋などを落橋させた現場（国道57号）など被災現場で2次災害防止の



大火砕流。○印は飲み込まれる寸前の家屋



覆いかぶさる溶岩ドーム

ネイチャーセンターの避難シェルター

火砕流最長到達点

ため使われている。

## ○ 島原「まゆやまロード」とネイチャーセンター

「がまだすドーム」（雲仙岳災害記念館）付近から島原市街に向かって「がまだすロード」が走っている。土石流発生に備えて、高架道路になっている。「島原大変、肥後迷惑」と有名な眉山の半分が崩れ落ちた山体崩壊跡を左手に見ながら途中、左折、島原まゆやまロードに入ると、目の前に平成新山と溶岩ドームが真正面にそびえ、圧倒される。

この道は雲仙・平成新山と眉山の間を走る。水無川沿いと同様、火砕流と土石流に襲われた垂木台地（展望台）に平成新山ネイチャーセンターがある。

垂木台地は標高５５０ｍもあるが、火砕流はこの大地を越えて流れ下った。溶岩ドームが崩れ、その火砕流がこの地域の住家を焼き払い、土石流が田畑を埋め尽くした。その恐ろしい光景をビデオで見ることが出来る。草木全てが焼き尽くされ、消滅したため、火砕流などに被災し荒れ地に植生再生エリアが設けられている。火砕流と火山灰で一面、灰色の世界となった「荒野」では毎年、自然回復の植樹イベントが続けられている。

ネイチャーセンターでは平成新山の誕生（マジックビジョン）から溶岩ドームの形成までの経過、溶岩ドームの動きを観測するシステムの紹介コーナーがある。災害発生の、万一の時、来訪者が避難するシェルターも５か所設置された。

## ○ 生きている溶岩ドーム

平成新山の頂上付近に、傷跡の「かさぶた」のように、巨大な溶岩ドームが張り付いている。長さ６００ｍ、幅５００ｍもの巨大な溶岩の塊で岩の量は約１億㎥、ヤフオクドームの５３倍にもなる。溶岩ドームが出来て山頂は２４０ｍ高くなった。

ところが、この巨大な溶岩ドームが不安定で崩れ落ちる危険性が否定できない。地震や自身の重量、台風・降雨によって崩れ落ちて、麓の民家や施設に大きな被害をもたらす恐れがあり、２４時間体制の監視と警戒が続いている。観測によると、溶岩ドームは水無川沿いの大野木場地区に向かって年間６・５ｃｍ、これまでに１・２１ｍ動いている。もし、崩壊、落下（時速約７０ｋｍと予想される）が起きると約５分で国道５７号、約７分で有明海にまで達すると推定されている。

崩落に備えて、砂防堰堤をさらに高くしたり、床固めなど防砂対策が練られている。危険を避けるため、溶岩ドームの動きを監視カメラで常時、観測（砂防みらい館４Ｆ）して、工事関係者と住民へ防災情報を発信している。

## ○ 溶岩ドーム監視塔

峠を越えると、水無川左岸に出る。火砕流で４３人が犠牲になった現場（三角点）近くを降り、水無大橋へ。そこに国道５７号を越えて、大火砕流（１９９１年９月１５日）が到達した地点に標識がある。アーチを描く水無大橋を渡って、水無川右岸を少し上ると旧外木場小学校被災校舎に出る。火砕流がこの小学校を襲い、その熱風で炎上、破壊されたまま、火砕流の恐ろしさを後世に残し「災害悲劇を風化させず後世に伝える」ため焼けただれた被災時そのままに保存されている。子供たちの防災教育の教材となっている。

その隣に平成新山の溶岩ドームを監視する砂防みらい館がある。みらい館は普賢岳の平成噴火の資料展示（１，２Ｆ）も行っており、平成噴火時の迫力ある映像が見られ、砂防整備状況をパネルなどで展示している。

## ○「無人施工」の見学

みらい館の前庭には「無人施工」発祥の記念碑がある。火砕流や土石流が頻発して、警戒区域には立ち入れなくなった。しかし、被害を少なく抑えるためには防災のための砂防堰堤を造ったり、溜まった堆積土を除去するため、ダンプ、ブルドーザやバックホウなど重機を離れた安全地帯から遠隔操作する「無人施工」が、この被災現場で開発された。最初は溜まった土石の排除から始まって、２本

無人施工発祥記念碑。左は旧大野木場小学校

砂防みらい館

の砂防堰堤を築堤するまで技術を向上させた。

水無川１号堰堤（長さ８７０ｍ）は平成７年８月から２年半をかけて無人施行で完成させた。溜まっている土砂と砂利にセメントを混ぜて作った「砂防ソイルセメント」を約１ｋｍ離れた遠隔操作室から、無人ダンプで現場に運び、ブルドーザで敷きならし、締め固める作業すべて無人施工で完成させた。また、３号砂防堰堤は無人測量システムを開発して水は通すが大石は食い止める鋼製スリットを据え付けるなど、高度に開発した技術が駆使された。

無人施工

その後、熊本地震による斜面崩壊で埋まった国道５７号（熊本県・南阿蘇村）の現場や鹿児島・桜島、北海道・有珠山の砂防工事など、危険な現場でこの無人施工が展開されている。現在でも水無川上流の「床固め工」などが無人施工されており、無人運転のブルドーザの活躍を見ることが出来る。

（現地見学問い合わせ＝国交省雲仙復興事務所砂防課・電話０９５７・６３・４１４１、期間平成３１年１月～９月３０日）

◇　　◇

**○　土砂に埋もれた家屋群の保存**

火砕流が運んだ大量の土石は、雨が降ると土石流となって流れ下る。火砕流が「火攻め」とすれば、土石流は「水と土砂攻め」、それも土砂だけでなく巨石をゴロゴロと流し、家屋を破壊する。その惨状を「道の駅」近くの「土石流被災家屋保存公園」で見ることが出来る。１９９２年８月に発生した土石流で破壊され、屋根を残しただけで埋没した家屋１１軒が当時の惨状そのままに保存展示されている。

**○　がまだすドームへ**

道の駅、保存公園からすぐ近く、「がまだすドーム」に到着する。普賢岳、平成新山の噴火を学ぶ「雲仙岳災害記念館」で最近、展示がリニューアルされた。入館するとすぐ火砕流の恐ろしさを疑似体験できる。足元のガラス張りの廊下の下を、火砕流が走るスピードを赤い光の流れで見せてくれる。また大画面で、現実の火砕流の押し寄せてくる迫真の映像が上映される。島原半島・雲仙は「ユネスコ世界ジオパーク」に登録され、そのツアー情報も得ることが出来る。

がまだすドーム（雲仙岳災害記念館）

**○　平成新山ネイチャーセンター（島原市南千本木垂木台地）**

平成新山誕生時のビデオ、観測カメラによるリアルタイム「溶岩ドーム」の動きなど生々しい映像を見ることが出来る。センターの外に出ると自然再生エリア、さらに木橋を歩いて展望台に進み、高熱を浴びながらもたくましく再生しようとする植物など、火山と大地の営みの様子を観察出来る。

ここでは火砕流、火山灰によって出来た地層がそのまま保全され、高い学術的価値を持つと評価されている。国内は勿論、外国の火山学者、研究家がセンターを訪れる。ジオパーク関連の登山や観測ツアーも行っている。

電話＝０９５７＝６３・６７５２．火曜日休館。

土石流に埋まった家屋（保存公園）

**○　被災状況をそのままに、旧大野木場小学校校舎**

砂防みらい館の隣に、火砕流（平成３年９月１５日）で焼失した校舎が被災当時のまま保存されている。焼け焦げた机や椅子もそのままで、火砕流の恐ろしさを実感させる。校庭には緑の葉を茂らせたイチョウの木が立っている。火砕流で焼け、瀕死の状態から蘇った。芽を吹き、再び葉を茂らせ、成長を続けている。被災から立ち直るシンボルのイチョウだ。

○ **ジオパークガイドなどの問い合わせ**は、島原観光協会（電話０９５７・６２・０６５５）島原半島ジオパーク協議会（電話０９５７・６５・５５４０）

平成の噴火時の火砕流被害（上）と導流堤などによる対策後の状態（下）

無人施工の水無川のスリット（左）と砂防堰堤

**コラム　島原の素朴な石橋**

長崎市の名所・眼鏡橋は市内を流れる中島川にかかる石橋群の一つだが、長崎県内には佐世保地区や島原半島・南島原市北有馬地区にも優れた石橋群がある。岡林隆敏・長崎大学名誉教授らの説明を受けながら、石橋を中心とする土木遺産めぐり島原ツアーが開催されている。

北有馬地区の石橋は幕末から明治にかけて架けられものが多い。長い石材を使っているのが特徴。なかでも均整のとれた石橋は田中橋（明治３６年架橋）。橋長１３ｍ、幅員３・８、高さ５・５ｍ。アーチを描く輪石がはっきりと見え、頂点では輪石だけで保っている。壁石は乱積みだが、同程度の石が成形されている。「長崎県内でも傑作の一つ。名橋だ」と岡林教授。

最も古いのは面無橋（江戸末期）。日野江城跡の近くにあり、橋長１２ｍ、幅員３・４ｍ、高さ５・２ｍで、高江川にかかっている。構造はシンプルで、輪石も加工が少なく自然石に近い。「地元民が造ったような素朴な石橋」（岡林教授）だ。

一番大きく存在感を持つ石橋は元平橋（大正１０年）。橋長１８ｍ、幅員２・７ｍ高さ８・４ｍ。大きな壁面が比較的小さな石で積み上げられている。小ぶりで美しい石橋は坂下橋（明治２８年）。輪石が明確で、石工は上戸英助。

田中橋（坂下川、橋長１３ｍ）は均整がとれた石橋で輪石がはっきりと見え、壁石は乱積みだがよく整形されており、建設年が明治３６年と明記されている。「県内でも傑作の一つ」と岡林教授と評価している。

面無橋（おもなしばし、橋長12m、橋幅3.9m。江戸末期）（南島原市北有馬町）

# 4　「島原大変肥後迷惑」ツアー

## 雲仙地震、眉山山体崩壊、津波引き起こす

## 死者１万５０００人―「恐怖は今も」

### コース

がまだすドーム～秩父ヶ浦公園～仁田団地第一公園～ひょうたん池公園～白土湖。島原まゆやまロード（国道２０７号）で眉山を一周。

島原半島での火山性地震と眉山崩壊によって引き起こされた「島原大変・肥後迷惑」は、雲仙岳の前にそびえる「眉山」が火山性地震によって山体崩壊、現在の島原市街に崩れ落ち、甚大な被害を出した（１７９２年５月２１日）災害を言う。島原の町は土砂で埋まり、１万人とも言われる犠牲者を出した「島原大変」だけでなく、大量の土砂は有明海に流れ込み、大津波を引き起こした。津波は対岸の肥後熊本を襲い、５千人におよぶ犠牲者が出た。「がまだすドーム」（雲仙噴火災害記念館）では、大型の紙芝居風にその時、江戸中期寛政年間、約２４０年前の惨状を物語風に伝えている。

**○　死者推定１・５万人も**

史料によると、寛政三年十月、最初の地震が発生、以来、絶え間なく揺れが続いた。翌年の正月、眉山が鳴動をはじめ、山崩れが始まった。眉山後方の普賢岳が噴火、爆発、溶岩が流れ出始めた。二月になると眉山の揺れと山鳴りは一層、激しくなり、噴火も始まった。しかし、三月には地鳴りも崩落も嘘のようにおさまって住民はひと安心した。

ところが、四月一日夕刻、眉山が半分に裂ける大規模な山体崩壊（推定４億㎥）が起き、土砂が島原の街を飲み込み、有明海に突っ込んだ。海に落ち込んだ山魂は高さ１０ｍもの大津波を引き起こし、対岸の肥後（熊本）を襲った。また、島原にも返しの大津波が押し寄せた。推計では島原の死者は１０１３９人に上った。肥後側も４６５３人、天草３４３人、合わせて約１万５０００人犠牲者を数えた。世に言う「島原大変肥後大迷惑」である。

**○　崩壊恐怖は、今も**

火山噴火、地震、山体崩壊、それによる津波発生の恐怖は、今もある。

雲仙普賢岳で１９８年ぶりに火山性微動が始まったのは平成元年７月。同２年１２月から噴火活動が活発化。島原市が最初に警戒したのは、眉山崩壊だった。平成３年２月、眉山崩壊に備えた避難計画を島原市が発表、３月には避難訓練を行っている。島原大変は遠い過去の事では決してないのだ。

インドネシア・ジャワ島とスマトラ島の間、スンダ海峡でもアナック・クラカタウ火山の噴火・地震で山体崩壊、津波が沿岸のリゾート地を襲い（２０１８年１２月２２日）大きな被害を出した。桜島でも大爆発の後、山体崩壊、大津波の発生する可能性を否定できず、鹿児島市側に被害が出る恐れあり、海沿いの国道１０号バイパスを山側に変え、建設が進められている。

「がまだすドーム」の紙芝居劇場を出て、「島原大変」を実感するため、現地ツアーに出かけよう。

## ○ 白い崖が残る眉山

仁田団地第一公園に立つと、「島原大変」がどのように起こったかを見渡せる。

眉山には幾つもの白い崖が見える。今でも、地震などが起こると、岩石が崩れ落ち「ゴロゴロ」という不気味な音が、市民を不安がらせている。熊本地震の時（平成２８年）、眉山の５か所で崖崩れが起こり、大石が転がり落ちる音で、住民は不安で夜寝られなかった、という。

当時、島原城や武家屋敷は、眉山の崩壊被害を免れたが、城下町は崩落土―土津波で壊滅的被害を受けた。現在も眉山の麓には住宅街が広がる。

島原市街の前はすぐ有明海。湖のように静かな海が広がっている。港から少しばかり沖に、小島が点々と浮かんでいる。鷹島、亀島、兎島。子持ち島などその姿から名前が付けられている。大崩壊によって、絶壁の山に姿を変えた眉山から崩れ落ちた土砂が海に突っ込んで、海岸は最大８００ｍも海を進んだ。さらに、その土砂が樹木を乗せたまま海へ、今も浮かぶ小島を幾つも造り、現在では景勝地「九十九島（つくも島）」となって、海と島の景観を創り出した。島原港に出入りする船上から、島を間近に眺めることが出来る。

眉山の山体崩壊の爪跡と九十九島（手前）

## ○ 島と池が出来た

海だけではない。陸にも「島」が出来た。地元では「流れ山」と呼ぶ丘で、その一つを「ひょうたん池公園」で見ることが出来る。かつては、ひょうたんの形をした池の真ん中に「流れ山」の島があったという。

逆に、「くぼ地」も出来た。その窪みに水が溜まって出来た「白土湖」は澄んだ水をたたえ、そこからの池の水は緩やかな勾配を伝って流れ出る「音無川」となる。せせらぎがほとんど音をたてないのでこの名がある。

こうした島原半島の地形の変化を、伊能忠敬は１５日間かけて詳細に測量、「島原大変」を見事に地図上に記録している

島原の乱の決戦場、原城本丸の高台は９万年前の阿蘇火砕流は逆に熊本側から有明海を越えて運ばれたというから、一衣帯水、災害も隣同士、と言うことだろうか。

## ○ 島原まゆやまロードを走る

がまだすロードから島原まゆやまロードで平成新山と眉山との間を走る。平成新山の溶岩ドームが恐ろしいほど近くに見える。火砕流が焼きつくし、埋めた荒野が目の前に広がる千本木展望所、眉山を左に見ながら峠を登る。眉山は海側は大崩壊した絶壁だが、こちら側は樹木が青々と茂り、対照的に穏やかな山容を見せている。平成新山ネイチャーセンターをへて水無川左岸へ、それを渡る国道５７号・水無大橋に至る。

水無川は、土石流を海に流すため、導流堤が幾重にも重ねられている。その川最下流を渡るのが水無大橋だ。大きなアーチを描くニールセンローゼ橋で橋長３２５ｍ、幅員１２ｍ、１９９７年に完成した。橋の長さが３００ｍを越え、橋脚なしで川を一跨ぎするのは、土石流をスムースに通過させるためだ。太いアーチが細い鋼線で橋（桁・道路）を吊り上げている。

## ○ 溶岩ドーム、崩落の危険は今も

橋のたもと広場に火砕流到達地点の碑が立っている。火砕流は想定措定された以上に、国道５７号を越えたことを物語っている。ここから見上げると、平成新山、普賢岳山頂に巨大な溶岩ドームが見える。現在も地震や大雨で溶岩ドームが動いており、崩れ落ちる危険が続いている。もし崩壊すれば、岩石群と土砂は約７分で有明海に到

達するという。

火山災害は噴火による火砕流、土石流だけでなく、火山性地震による隣接の山の大崩壊、崩れ落ちる膨大な土石が街を襲い、さらに海に突っ込むと大津波を引き起こす。火山噴火は災害の連鎖が発生することを「島原大変肥後迷惑」は、今も、我々に教えている。

## コラム　小さな旅③
## 復活せよ　島原和ろうそく

島原藩の領地は、火山灰土がほとんどで、藩の台所は苦しかった。そこへ普賢岳が大爆発（寛政四年）の大被害。藩は、火山灰に強い櫨の木の植樹を奨励、その実から蠟を取り、和ろうそくを生産、地場産業の主力とした。ろうそくは、当時、今の電灯と同じ、暮らしに欠かせない「灯り」だから、需要は大きく広い。ろうそくで藩財政を建て直した。

災害は忘れたころにやってくる。普賢岳が一九八年ぶりに噴火（平成2年）、火砕流と土石流で櫨の産地は壊滅的な打撃を受けた。しかし、木蠟づくり三代目・本多俊一さん（本多木蠟工業代表）は考えた。「かつて島原藩の財政を救った木蠟で、島原再建が出来ないか」。安中地区は土石流で、千本木地区は火砕流で被害を受け、現在、国土交通省の管理下にある土地が多い。地方自治体と共に植林する。「櫨の木は火山灰地に強く、その実を収穫、加工して製品化する地場産業を蘇らせることが出来る」と本多さん。

本多さんの工場では、櫨の実を砕き、蒸して蠟分を絞り出す、日本で唯一の「玉締め式製法」でろうそくを製造している。しかも「手がけ手法」で一本一本手造りだ。和紙にイグサを巻きつけた芯に溶けた木蝋をかけ、乾いたら、また、かけるの繰り返しで成型する。こうして出来たろうそく（本多木蝋）の炎は、大きく美しく、ゆらめく。芯が空洞になっていて、空気が通りやすいためだ。

危機に立つ島原に根ざした伝統産業・木蠟を守り、蘇らせるため、本多さんは「櫨の道資料館」でろうそく作りや絵付け体験教室を開き、定期的に音楽ライブなども開催して木蠟への理解を広めている。（圭）

日本唯一つの「玉締め式製法」で製造する櫨の道資料館

櫨の実を砕き、蒸して蝋分を絞り出してつくられた和ろうそく

本多木蝋工業所
島原市有明町大三東丙 545 番地
TEL　0957－68－0015

# 四　戦国島原
## ―キリスト教国の出現

国道２５１号で諫早市から有明海沿いに南に走り、島原市、さらに南島原市への道筋には、島原の戦国史、キリシタン教国となった有馬藩時代の遺跡、弾圧との戦いの拠点となった原城跡等、波乱、激動、そして悲劇の島原の歴史を物語る場所が並ぶ。島原城、日野江城、そして島原の乱の拠点となった原城などの城址、関連する資料館、史跡などが島原風景街道の「主たる道」国道２５１号沿いに並んで歴史を生々しく今に伝えている。

### ○ 沖田畷の戦い

島原市の北、国道２５１号沿いに、古戦場・沖田畷（島原市北門）がある。小さなお宮だ。九州制覇、さらには天下をも狙った肥前の雄、竜造寺隆信が大軍を率いながら有馬晴信・島津連合軍に敗れ、首を取られた（天正１２年３月、１５８２）古戦場である。竜造寺ＶＳ有馬の戦いは、それまで３０年以上も繰り返されてきたが、竜造寺が圧倒していた。

竜造寺隆信の肖像画が佐賀市の宗龍寺にある。巨漢で、濃いひげ。あまりの肥満の為、馬に乗れず戦場にも「輿」にかつがれて、戦さに臨んだ。でありながら、戦闘に強く、現在の福岡県のほとんどと、佐賀、長崎を押さえ、東九州・豊後の大友、南九州・薩摩の島津と九州を３分するまでに版図を広げていた。

佐賀・小城の戦いで有馬を破り、その支配下に置いていた。その島原半島（当時は高来）のキリシタン大名・有馬藩が島津と通じ、謀反の心ありと、隆信は総勢２万５千の大軍を繰り出した。黄金の鎧、金の兜、それも一千の鉄砲隊を隊列の前後に置く、華やかな「熟練の戦闘軍団」（フロイスのローマへの手紙）を率いて、成敗に向かった。有馬、島津連合軍は６０数本の十字模様の旗印ひるがえし、迎え撃った。十字はキリスト、丸に十の薩摩の印の両方を示していた。連合軍は計一万ほど。「なに、有馬など踏み潰してくれるは」と隆信は構わず、大軍を平地の狭い島原に進めた（天正十二年・１５８４）。

### ○ 隆信、討ち取ったり

有馬・島津陣営は森岳、後に島原城が築かれる小高い丘に陣を構えた。連合軍は湿地の多い「沖田」に竜造寺軍を巧みに誘い込み、さらに「畷」の一本道しかない決戦場で迎え撃った。沼地で大軍の動きを止め、島津得意の「伏兵」を潜ませ一本道で各個撃破する戦法で、大将・隆信を打ち取った。加えて有馬軍は大砲二門を乗せた軍船で砲撃して、狭い地形にひしめく大軍に大損害を与えた。「一発ごとにお祈りして砲撃すると命中した」（ルイス・フロイス）、金色の鎧装備の敵軍団を粉々に吹き飛ばしたという。イエズス会は鉛、硝石などを大量に有馬藩にもたらし、軍事支援を行った。

薩摩軍は白兵戦に強く、敵に鉄砲隊の弾込めの時間を与えず、短槍で突撃、長槍の竜造寺軍を圧倒した。総大将・重信は沖田の戦いで打ち取られ、戦場に首はさらされ、戦利品として薩摩に持ち帰られた。

沖田畷の古戦場跡

### ○ キリスト教国を築く

こうして有馬・島原は安定を得て、城主・有馬晴信は、竜造寺との戦いにイエズス会の軍事支援があったことから、南蛮貿易をさらに進め、修道士アルメイダの布教を許し、教会建設も認めた。キリスト教徒が増え、南蛮船のもたらす富も得て、キリスト教国が出現かに思えるほどの繁栄だった。秀吉の禁令後は、全国の神父が「安全の地」有馬氏の領地に逃げ込んできた。

居城は日野江城（南島原市南有馬）で、森に囲まれた小高い丘、その城址へ登る途中に、二の丸への直線１００ｍもの階段道路があった。石段の踏み石は仏教式の墓石、五輪の塔を使っている。

晴信は慶長１７年（１６１２）所領没収、追放、切腹を命じられたが、キリスト教徒として拒否、家臣に自ら斬首させた。

日野江城跡の全景

日野江城の石段

## ○ 日本最初のセミナリオ

日野江城近くに日本で最初の「有馬のセミナリオ」跡の石碑が説明文と共に立っている。発掘調査で金箔の瓦、花十字の五輪塔などが出土、華やかな城構えだったと思われる。

このセミナリオ(初、中等の神学校)には18歳までの少年がマカオからの留学生を含め最大130人がラテン語、ポルトガル語を学んだ。その中のペトロ・岐部、中浦ジュリアンら13歳前後の4人(セミナリオ一期生)が有馬、大村、大友藩からローマ法王への天正少年使節団となって、船出した。スペイン国王、ローマ教皇らと会見、8年半後に帰国した。原城跡からは、金の十字架(22金、3・2×4・8cm、大阪・南蛮文化博物館所蔵)が出土、使節団が持ち帰ったものではないかとされる。

出土した金箔の瓦

彼らの帰国を報告するイエズス会の文書には、日野江城の様子を「大小の部屋は全て黄金の品や華麗な絵画で飾られていた」。また「襖20枚の大部屋が3つ続いた大邸宅があった」とある。

## ○ 砲弾に、嘲笑の矢文で反撃

また、有馬のセミナリオの生徒が作成した日本最古の一枚ズリ銅版画(レプリカ)が有馬キリシタン遺産記念館(南有馬町)に展示されている。この記念館は日野江城などキリスト教の伝来から繁栄と弾圧、そして原城跡の島原の乱を伝える史料が保存、展示されている。原城本丸正門の人骨出土状況のレプリカ、十字架、メダイ、ロザリオの珠など出品。撃ちこまれた砲弾もある。

原城を攻めあぐねた幕府軍がオランダに依頼して海から砲撃した。籠城軍が期待したかも知れないキリスト国の海からの支援を逆手に使い、戦意を挫こうという狙いがあった。オランダ船名は「デライブ」号。430発もの砲撃を行った。砲撃は「天地を轟かし殷殷轟轟白煙は波間に漂い物凄く」あったが、射程距離が短く、かならずしも大戦果を挙げたとは言えないようだ。

籠城軍は矢文で反撃した。この戦さは「小事に儀に御座候処、漢土まで相催され候事、城中の下々の故に日本の外聞然るべからず候」と外国の手まで借りる幕府軍を侮り「堂々たる官兵も天守に敵せず、外人を引いて援と為す、誰か信綱智ありといわんや」と嘲笑の矢文で応戦した。この一矢で砲撃は止まり、オランダ船は姿を消した。しかし、船の大砲は陸上に上げられ、至近距離から砲撃、原城軍に打撃を与えた。乱前に島原城築城の材料として、原城石垣は運び出され、城壁はほとんどなくなっていたのだろう。急ごしらえの原城の防衛柵は竹や木材で、砲弾を跳ね返す壁とはならなかった。

## ○ 百姓一揆とは違う、強力な戦闘集団、

原城跡から人骨と共に、弾丸が多数、出土している。籠城軍には旧有馬藩士が多数いたと思われる。キリシタン大名・晴信は、南蛮貿易を奨励した。当然のことながら、西洋の武器、特に鉄砲をどこの藩より持っており、射撃の名手も、熟練の鉄砲鍛冶もいた。まして、原城は海に突き出るように、3面が断崖と海で囲まれ、城は段丘の上にある。

戦闘は正面での攻防で、しかも、空堀のぬかるんだ湿地帯を挟んでの対峙だった。12万を超える大軍で包囲する幕府軍とはいえ、手こずらざるを得ない。突破口を開くべく、前面に出た幕軍総司令の板倉重昌は胸を撃ち抜かれ、あえなく戦死した。重昌の碑は城址に今もポツンと立っている。かくて、筆頭家老の松平信綱が総大将として出陣、陣頭指揮せざるを得ない戦況に陥った。

秀吉の、それに続く徳川幕府の禁礼、弾圧。徳川幕府から晴信に長崎奉行暗殺計画

の疑いがかけられ，甲斐に追放、自死の憂き目に。後を継いだ息子、有馬直純は棄教して、延岡へ転付した。棄教を嫌い、付き従わない家来も多く、百姓として島原に残った。

日野江城と原城、二つの城址周辺には、有馬の家臣家族８人の「有馬川殉教記念碑」などもある。棄教より死を選んだ武家家族である。原城の戦いで一揆方の主力武装団となったのは士分を捨て、百姓となった旧藩士ではなかったか。彼らは鎌やクワ、竹やりの百姓一揆とは格段に違う、鉄砲などの戦闘能力を備えていたし、キリスト教に支えられた戦意も高かった。

## ○　２世紀に渡る潜伏信仰

原城跡が世界文化遺産・その１２の構成資産のトップにあげられているのは「潜伏キリシタン」の始まりの地だからだ。島原の切支丹は幕府軍によって、皆殺しになった。ほとんど全員がキリスト教徒だった口之津や有家地区は文字通り、空っぽとなり、代わって移住してきた人々は仏教徒だった。教会は打ち壊され、宣教師は国外追放。幕府は宣教師を連れてくるかもしれないポルトガル船の入港を厳禁して潜入の道を断った。１７世紀後半には大規模な潜伏切支丹の摘発、拷問によって棄教、あるいは殉教していった。１８世紀初頭（１７０８年）イタリア人司教シドッテイが密入国したがすぐ捕えられ、幽閉、獄死している。

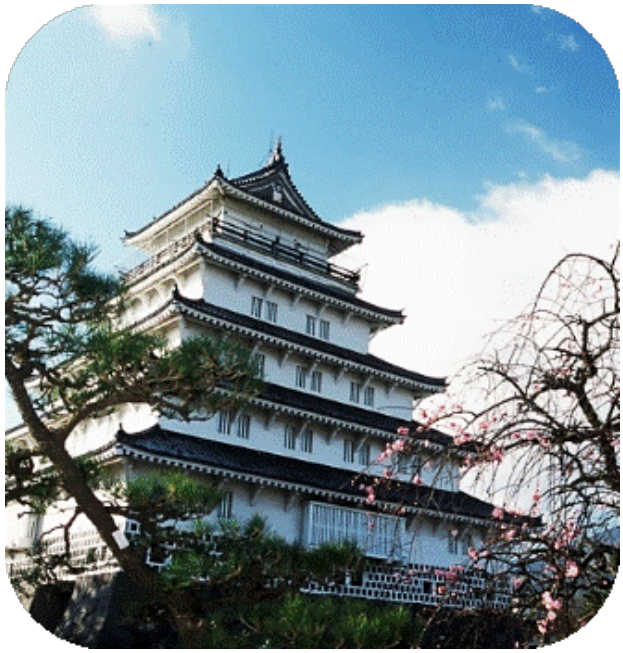
息の根を止められたかに見えたキリスト教徒は独自の信仰の形をとって「潜伏」し継続して行く。山や島を聖地と見なしたり、聖画像を密かに拝み、菩薩や神社に信仰対象を重ねるなどの信仰形態をさまざまにしながら独特の信仰の形をつくっていった。明治政府が解禁（１９７３年）するまで、２世紀に渡って潜伏が続いた。

## ○　国際港になった口之津港

キリスト教布教と貿易の基地は島原半島の南端、口之津（南島原市）だった。海沿いの公園に、キリシタン巡察使・ヴァリニヤーノの像がある。セミナリヨ（初等学校）やコレジョ（大学）が出来、「キリスト教国」が出現したかのような繁栄ぶりで、ほとんどの住民が信徒となった。秀吉、幕府の禁教政策は「布教で心をつかみ、やがて国を取る」恐怖心からだとも言われるが、ヴァリニャーノ巡察師は、「適応主義」をとり、宣教師たちにそのような言動を厳しく禁じていた。

原城籠城軍には一人の宣教師もいなかった。そしてキリスト教国からの援軍はついになかった。落城は寛永１４年２月２７日。征討軍は原城に生き残った者、非戦闘員の女性、子供まで全て殺し、その数３万７０００人、地に埋め城壁の巨石をかぶせ、地上から消し去った。唯一人の内通者だった絵師「山田右衛門作」を除いて。

最近の発掘調査で、原城本丸大手門前の地中から多くの白骨が出土している。



五層の島原城天守閣

## ○　そびえる白亜の島原城

有馬に代わって島原領主となったのが、松倉重信であった。城づくりを得意とした重信はわずか４万石の小大名でありながら、巨大、堅固な城を望んだ。有馬本城は日野江城で、島原城から２８ｋｍ南、近くに三方海に囲まれた要塞堅固な原城もあった。しかし、重信はそれを引き継がず、分不相応な城を望んだ。

旧城は明治になって取り壊され、今に残る島原城は昭和３０年代に建てられた「新城」。しかし、５層の天守閣、３層の櫓が再現され、周りは高い石垣と深く掘り込まれた濠で厳重に守られている。

一揆軍は島原城を取り囲んだが、ついに、落とせず、廃城となった「原城」に立て籠もり、幕府の１２万の大軍を相手に戦ったが、多勢に無勢。凄惨な終末を迎えた。有馬氏の日野江城や原城の石垣は、島原城建設の為、運び去られ、丸裸の城跡となっていた。重信の築城戦略は当たったと言えるだろうが、領民の苦しみを顧みない強権による大規模築城は領民に憤怒を残した。戦国の世が去り、多くの戦国大名は、幕藩

水路のある武家屋敷

五層の天守閣をもつ島原城

一揆勢に立ちはだかった大手門

体制になると、領地経営に努力を惜しまず、島原対岸の肥後・加藤清正は治水、干拓などに力を入れ、隣の肥前・鍋島藩は家老・成冨兵庫を中心に干拓、治水、利水などのインフラを整備、農業振興で国力充実をはかって、領民の信頼と尊敬を集めている。

島原のクリスチャン弾圧政策の強化、新城建設をはじめ軍備増強を力づくで推進した松倉・島原藩は人心を失い、新城建設以上の対価を支払わなければならなかったと言えるだろう。

◇　◇

**○　天正遣欧使節団**

千々石ミゲル、伊東マンショ、原マルチノ、中浦ジュリアンの少年使節団が巡察師ヴァリニャーノによって送り出された。彼らにヨーロッパの偉大さを見せ同時に日本での布教の成果を伝えるためローマ教皇との会見が目的だった。天正10年（1582）出発、同18年（1590）の帰国までヨーロッパを回っている。帰国後、彼らは九州各地での布教活動を行い、持ち帰った活版印刷機でキリスト教の出版事業を行っている。しかし千々石ミゲルはイエズス会を退会、大村藩に仕えたが、追放された。

活版印刷機は多くの出版物を誕生させた。イソップ物語の翻訳から語彙数3万2800語を収録する「日葡辞典」にまで及んでいる。その印刷機のレプリカが原城跡近くの有馬キリスト教記念館に展示されている。

**○　神学校・コレジョとセミナリョ**

イエズス会は天正8年（1580）安土と島原・有馬にセミナリョ、大分にコレジョを開設した。日本人司祭の養成が目的だった。しかし、秀吉の禁教令、徳川幕府のさらに厳しい禁教・鎖国令と弾圧の時代を迎えた。布教と聖職者養成の為、造られた神学校だが、禁教令と弾圧で転々としている。セミナリオは最初、日野江城内にあったが、各地を回って、有馬に移され、教会と同じ敷地に造られた。コレジョは大分（府内）山口、長崎から有馬へ、さらに和津佐へと移った。慶長3年ごろには両神学校とも長崎（岬の教会）へ。やがて姿を消した。

**○　ルイス・フロイス（1532～1597）**

ポルトガル人が種子島に漂着、鉄砲を日本に伝えたのが1543年。次いでフランシスコ・ザビエルが鹿児島に到着、キリスト教の布教を始めた。山口の大内義隆の庇護の元、布教活動を行い、次いで、大分の大友宗麟の許可を得て布教を続けた。ザビエルが離日した後、ルイス・フロイスは織田信長と会見している。南蛮貿易に魅力を感じた九州の大名、大友、大村、有馬藩主がキリシタンとなり、つかの間のキリスト教国が出現した。

## 3　國際港・口の津、その栄枯盛衰

### キリスト教布教の基地、最高学府も
### 石炭ブームと、からゆきさんの悲しい物語

島原半島の最南端に、小さな岬、早崎半島の腕に抱え込まれるように、深い入り江の口之津港がある。天草と結ぶフェリー乗り場近くの公園に大きく帆を張った南蛮船を描いた看板絵と巡察使師宣教師ヴァリニャーノの胸像があった。16世紀、長崎港と平戸と並ぶ国際港湾として栄えた町の歴史を物語

口之津港に建つヴァリニァーノ像

っていた。湾口には、明治時代の税関事務所（長崎税関口之津支署）の建物が見える。建物は保存され、口之津歴史民俗博物館（海の資料館）となって、大牟田・三池炭鉱からの石炭を海外に積み出した国際港だった名残りでもある。口之津港は水深が深く天然の良港だったが、時代は移り、今は天草往復のフェリーが行き交うだけだ。有明海の口の港だから口之津となった。島原半島出入りの口のため、古来、良港として栄えてきた。

## ○ 長い航海の末に

最初に口之津にやってきたのは宣教師・ルイス・アルメイダ。キリシタン大名の有馬義直が開港、キリスト教と共に貿易南蛮船を招き入れた。有馬家からの養子、キリシタン大名・大村純忠は長崎を教会領としてポルトガルに与えた。有馬藩も又、島原半島の先端・口之津を南蛮船の港とした。

遠くポルトガル・リスボンの港からアフリカ喜望峰を回って長い航海の末、口之津にやってきた。彼らもキリスト教の布教と貿易の利を求めてである。リスボンのテージョ川沿いに「発見のモニュメント」がある。大航海時代を切り開いたヴァスコダガマやマゼランら英雄たちの列に日本で初めて布教活動を行ったフランシスコ・ザビエル像（鹿児島上陸は１５８０年）もある。長崎、島原など九州も「発見」された国の一つだったのだろう。

口之津港から数分歩くと、最初の南蛮船渡来の地が大きな公園となっている。最初の入港は１５６７年、南蛮船３隻がポルトガルから長い航海の末、着岸した。ルイス・フロイスは織田信長に会見、布教を許された。その後、口之津に住み、織田信長の本能寺での死をここで知った。フロイスは「日本史」を書き、信長の強い異国への好奇心や秀吉の「女好き」の有様など、生々しく人物像を描いている。

## ○日本布教の基地に

宣教師たちはこの地を日本布教の「入口」拠点とし、岬の高台に教会を、さらにセミナリ（初等学校）を建てた。口之津のほとんどの住民はキリシタンになるほどであったという。港の公園に胸像が立つイエスズ会巡察師ヴァリニャーノが来て、日本での布教戦略を練り、宣教師たちに指示したのも口之津だった。保護政策をとった有馬藩にも、南蛮貿易の「利」は大きかった。

南蛮船渡来の地（口之津）

口之津税関跡（口之津歴史民俗資料館）

石炭運搬用大型貨物船（模型）

隣の加津佐にはコレジョ（大学）があった。九州のキリシタン大名がローマ法王に送り出した４人の少年使節団が持ち帰った活版印刷機がここに置かれ、多くの布教のための印刷物を出した。島原半島の南端・口之津は約２０年間、キリスト教の情報発信基地にもなった。秀吉、次いで徳川幕府の禁令が出ると、各地から宣教師たちが有馬藩内に逃げ帰った

## ○三度の日本一の賑わい

そうした１６世紀後半の口之津繁栄の時代を伝えるのが「口之津歴史民俗資料館（海の資料館）」だ。湾沿いを半周して岬に向かうと、赤いアーチ橋が渡っている。車１台分幅しかない。そろそろと渡り、橋のたもとに資料館があった。案内パンフレットに口之津は「歴史上、大きくは三度の日本一ともいえる賑わいを呈した。最初は一六世紀後半に南蛮船の来航、次に明治になって三井三池石炭の海外輸出中継港。さらに日本一の船員の町」と誇らしく書き込んでいる。

有馬藩時代の異国情緒豊かな時代が終わり、禁教と過酷な弾圧、それに抗する「島原の乱」が鎮圧されると、口之津は南蛮国際港から元の天然の風待ち港に返って行った。再び、活況を取り戻すのは明治に入ってからだ。明治政府は外貨獲得の為、三池

炭鉱の石炭輸出に力を入れた。ところが大牟田・三池港は厚い干潟で大型貨物船は出入りできない。

有明海を横断して口之津まで石炭を満載した平船が数珠つなぎになって入港、口之津港で大型貨物船に積み替え、輸出した（上海輸出は明治１１年開始）。資料館の海沿いの一角に石碑が建っていた。三井船舶設立、同社が口之津港を足場に成長した記念碑だ。

## ○　与論島から村ぐるみ移住

積み込み用のベルトコンベアはないから、荷役は全て人力。当然、人手がいる。人夫不足を補うため、はるか南方、沖縄の与論島から村ごと移住してきた、集団移住は明治３２年。歴史民俗資料館は港の繁栄を物語る数々の資料を展示しているが、与論長屋を再現したり、与論館を別館として、港を支えた与論島民への感謝を今なお表しているように思えた。与論の民俗資料と共に、島の中学生が修学旅行に訪れ、村の先祖の人たちの苦労をたどる写真が掲げられていた。

最盛期は明治３０年代。口之津の人口は増え、長崎港と肩を並べる港町に成長したが、三井の総帥、団琢磨が三池港を改築、有明海の干満を利用できる国際港を築港すると、口之津港の火は消えて行った。三井物産の出張所閉鎖は大正１２年。

展示の中にカナダ国旗があった。長野萬造、カナダ移民１号となった。港を船員となり出入りする外国貿易の大型船にあこがれ船員となり、カナダに寄港した時、密入国。塩鮭の輸出で大儲けした。新天地を求めた萬造を日本人のカナダ移民１号カナダ政府が認定、その業績をたたえている。

## ○　からゆきさんの悲話

華やかな港物語りだけではない。東南アジアへ渡っていった「からゆきさん」の悲話は、展示の資料が今に伝えている。黒ダイヤと呼ばれた石炭運搬船の船底に押し込まれ、娘たちは売られていった。１枚の身売り状（契約書）が展示されていた。島原や天草の貧農の娘たちは「島原の子守歌」のように，暗い船底で身の不幸を嘆き、異国へ。そのほとんどは故郷に帰ることはなかった。この子守歌は島原の作家・宮崎康平氏の作品だが「青煙突のバッタンフール（石炭運搬船）　唐は何処にき――海の果て」と唄い、数少ない「成功者」が、「金の指輪はめとらす――唐金げなバイ」と歌詞にある。資料館には、からゆきさんが、こっそり急須の注ぎ口に懐中時計など小さな貴重品を詰めて帰国した、その急須が展示されていた。

## コラム　３度も打ち壊された霊山、仏たち

雲仙開山は「行基」（大僧正）と伝えられる。行基は奈良の大仏建立ため全国を行脚し勧進、各地で庶民のためにため池、道路づくりなど土木事業を行い「他利業」に生涯尽くした。雲仙開山は７０１年、行基３１歳の時という。雲仙お山の情報館副館長、西久幸さんはその縁起のコピーを取り出して「有馬温泉はじめ、草津、山中温泉など全国の有名温泉には行基さんの足跡の言い伝えがあります」。信者は行基集団を形成。雲仙は寺院３５０、信者３０００人を超え高野山、比叡山に並んで３大霊山だった、と言う。

その雲仙霊山は何回もの破壊の波を受ける。最初はクリスチャン大名・有馬晴信の命によって「４０を超える神社がことごとく破壊され、教会建立の材料となった」（ルイス・フロイス「日本史」）。晴信の居城・日野江城の石段は仏教徒の墓石で造られた。キリスト教徒への転宗も強制されたのだろうか。「当郡南蛮宗にて、温泉坊中残りなく破滅に候」と古文書にある。

キリスト教禁令、島原の乱によってキリスト教は潜伏教徒を除いて島原から排除され、霊山、寺社は復活する。山岳修行する者にとって、不気味な形の岩の間から、ゴウゴウと音をたてて吹き出す火山ガスと湯煙の光景は「地獄」をイメージさせる絶好の場所だったのだろう。

第２の嵐が押し寄せる。明治初めの「廃仏棄却」の暴風は雲仙の寺社を破壊し尽くし、仏像を打ち壊した。その後、満明寺が再建され、釈迦堂・大仏殿に金箔の大仏（奈良の大仏の３分の１）が納められた。

３回目は、敗戦後の占領軍。雲仙には首なし地蔵が多い。進駐した若いＧＩたちは、お地蔵さんの首をハンマーで打ち壊したり、射撃の的にしたり、度の過ぎるいたずらだった。「こんな３度もの破壊の波を仏様たちは受けたのは歴史の事実です。キリスト教徒だけが、受難の歴史なのではありません」と西さんは、もう一つの受難史を語った。

# 4　原城跡に立つ

幕府軍、１２万で包囲、約３万７千人、皆殺し
難攻の原城、鉄砲で武装、信仰の強さを持つ一揆軍
今なお、人骨、十字架が出土

**○　島原城、落とせず**

江戸幕府の時代となり、キリスト教禁制の後、延岡に去ったクリスチャン大名の有馬家に代わって、入封した松倉豊後守重信はわずか４万石の小大名でありながら分不相応な城づくりを始めた。森岳に五層の天守閣・本丸と二の丸（武器庫など）を置き、北側の三の丸と本丸御殿。四隅に三階建ての櫓を配置する豪壮な構えだ。

膨大な建築費と労力は、領民・百姓に負担させた。容赦ない重税と過酷な強制労働。それは１６１８年から始まり、７年がかりの大工事だった。高さ５・７ｍの石垣の上に２７ｍの天守閣が高々とそびえる。文字通り、領民の汗と血であがなわれた。築城後も、重税は続き、それに飢饉とキリスト教弾圧が重なって、百姓一揆が発生した。有馬藩時代からキリスト教徒が多く深江、有馬、有家などの百姓は手に手にクワや鎌を手に「恨みの城」に攻め寄せた。城下町は焼き払われたが、幾波もの一揆軍の攻撃を堅ろうな島原城は刎ねかえした。島原の乱の始まり（１６３７年）であった。有馬・島原藩（２６万石）の城は、島原城の南約１８㎞、日野江城にあった。

**○　原城跡に立て籠もる**

島原城を攻め落とせなかった一揆軍は、島原半島の南に下って、かつてのキリスト教国を築いた有馬藩・原城跡に立て籠もった。同じように唐津藩・富岡城（天草）を攻め落とせなかった天草の一揆軍も原城に合流した。

島原市から国道２５１号で火砕流、土石流に襲われた水無川を渡って、左に有明海を見ながら、南島原市に入り原城跡に着く。城郭の北はずれの駐車場に車を置き。原城跡に向かった。世界文化遺産（長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産群）に登録されて、来城者が急増、韓国などからビジターも多い。駐車場から無料のシャトルバスが走っている。

原城本丸跡　（左側に天草四郎の居所があった）

原城本丸大手門の石垣　（この下から人骨と十字架が出土）

原城跡の慰霊碑

原城大手門から出土した人骨（レプリカ）

## ○ 本丸前に着く。

原城跡は世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」（平成３０年７月登録）の代表的構成資産だ。この城はキリシタン大名・有馬晴信が本城・日野江城の支城として築いた。支城とは言え、原城は、三方を海と崖で囲まれた丘陵で、前面は湿地帯という守りの堅い城であり、籠城にはこの上ない地理的条件を備えていた。本丸のほか二，三の丸、鳩山出丸、天草丸などを備え、本丸は総石垣造り。晴信は関ヶ原の戦いの二年前（一五九八年）から六年をかけ築城した。

晴信は１６１２年に失脚、跡を継いだ直純は棄教して日向・延岡に転封した。しかし、それを潔しとせず、島原に残り、教徒として牢人、帰農した家来が多く、一揆軍の指導的な立場を占めていた、とされる。彼らは禁制でいったんは潜伏しながら、「立ち返り」キリシタンで、一揆軍の強さの秘密はその信仰の精神的支柱にもあった、と思われる。

## ○ 出土した無数の人骨

本丸正門跡には巨石の石垣があった。お願いしたガイド・内山哲利氏によると、鎮圧後、幕府は石垣を壊し、埋め立て、城全体を土盛りの丘にした。「一般に原城の石垣は島原城に移されたとされていますが、実際には大半が残されていたと思われます。そうでなければ、あれほどの長期の防衛戦には耐えられなかった」と思います。

最近の発掘調査で石垣８基の正門礎石が現れ、崩落させた石群を取り除くと無数の人骨が現れた、という。彼らが握りしめていただろう小さな十字架や無数の弾丸が出土している。幕府軍は惨殺した死体に巨石と土をかぶせ、痕跡を消していたのである。

島原城を落とせなかった一揆軍は、廃城となっていた原城に陣を構え籠城、その数２万数千、天草四郎時貞を総大将に、幕府鎮圧軍約１２万余。攻防は３カ月続いたが、一揆軍と立て籠もった領民計約３万７千人が、幕府軍と通じていた絵師一人を除いて皆殺しとなった。

原城を訪れた桑原武夫（京都大学教授）は乱を「日本の思想の自由を守る最大の戦い」であり「近代と中世の戦い」と位置づけ、「その悲惨の密集度は原子バクダンのはるかに上を行くものだ」（考史遊記―島原半島旅日記）。

原城跡本丸に立って、沖を見ると、青い海に小さな島・湯島が見える。「談合島」とも呼ばれ、島原勢と天草勢は合同蜂起の決意を交わし、作戦を練った。

総大将・天草四郎時貞、１５歳の少年で、既に数々の奇跡を現していると人々に信じられていた。天草・大矢野島出身。籠城勢は２万数千人、加えて女性子供も城に入った。

## ○ 天草四郎時貞、蘇る

原城はその美しい姿が「日暮城」とも呼ばれ、本丸跡に、白装束の凛々しい天草四郎のブロンズ像がある。鉢巻をきりりと締め、目をつぶり、両手を組み合わせて神に勝利を祈るかのような立ち姿だ。本丸の城門の左側に彼の居室があったとされる。包囲網をしく幕府軍の布陣が見渡される絶好の高台だ。遠くに雲仙・普賢岳が望める。ここ、幕府軍を眼下に収める正門脇の部屋で、四郎は碁を打ち、総大将としての余裕

天草四郎像（原城跡）

天草四郎の墓碑

討ち死にした板倉重昌の碑

を見せたという。最終の攻防で四郎は敵弾に傷つき、本人とは知らない細川藩の手勢に首級をあげられた。首実検でやっと確認できたという。首はさらされたが、小さな墓碑が城内に建てられている。民家の石垣の中から見つかったものだという。

本丸から少し下る小高い土塁に、最初の幕府軍総大将・板倉重昌の墓がある。攻めあぐね、ほとんど単騎で突進し、城方の弾丸撃ち抜かれた。原城跡からは無数の弾丸が出土する。南蛮貿易もあってか、島原には鉄砲名手が多かったし、士分を離れても鉄砲猟師となり腕を磨き、鉄砲鍛冶の技術も優れていた。島原藩の口之津鉄砲蔵を襲い、1千丁もの銃と合わせて火薬も原城に運び込んだ。城内に撃ちこまれた鉛弾を再生し、あるいは精神的武器としてクルスに作り直した。裸城同然となっていた原城は木柵や矢来でにわかに防備を整えていたとはいえ、鉄砲が何よりの主力武器だったのであろう。細川藩に従って出陣した剣豪・宮本武蔵も負傷して下がっている。

**○ 落城、3万7千人の虐殺**

「智慧伊豆」の別名がある松平伊豆守信綱が、長期戦を構えて包囲、兵糧攻め、矢文を撃ちこむ情報戦などを展開、攻め落とした。1638年2月末、兵糧攻めで飢餓状態に追い込まれ、総攻撃で「落城」した。城内に籠った約3万7千人は内通していた絵師一人を除いて、皆殺し、虐殺された。

外国宣教師、神父は一人もいず、乱はローマ法王庁へも報告されることなく、今も殉教とは認められていない。長崎市・西坂に26人の殉教者が聖人として祀られている。十字架の陣旗を掲げ、胸にクルスを抱いた島原の乱の一揆勢は殉教者として扱われることなく、ことごとくが地中に埋められたまま白骨となり、400年を経て、世界遺産「潜伏キリシタン関連資産」の一つとなった。

島原の乱は苛政に追い詰められた江戸時代の最大規模の農民一揆であり、そうは認めたくない幕府には宗教反乱の鎮圧だった。天草四郎らの首は長崎出島にさらされた。異邦人が滞在する出島を選んだのは、「キリシタンは異国の教えを受け、国を奪う者ども」として禁教への幕府の強硬な意思と姿勢を内外に徹底したかったのだろう。

乱後、さらに厳重な鎖国政策がスタートし、信徒たちは2世紀に渡る長く厳しい潜伏の時代に入って行く。世界文化遺産「長崎と島原地方の潜伏キリシタン関連遺産」は長崎市や平戸、五島などの計12か所の集落、教会で構成されているが、原城跡はその「始まり」の地となっている。

◇　◇

**○ 西村西望氏のブロンズ像**

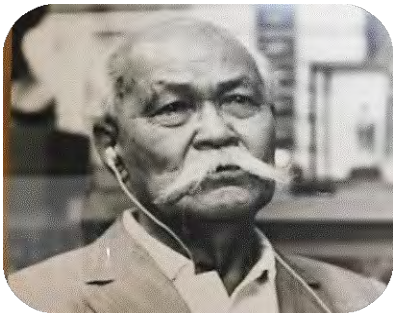
四郎のブロンズ像は文化勲章を受章した彫刻家、北村西望氏（文化勲章受章者、1884～1987）の作品。西望氏は南島原市南有馬・白木野出身で生家は原城が見下ろせる山腹にあり、木造2階建ての大型民家は、現在、西望公園・記念館となり、西望の生涯や作品を見ることが出来る。記念館の玄関にヘルメット（鉄兜？）かぶり、ぶかぶかの長靴を履いた少年像「今日わ」が敬礼で迎えてくれる。代表作である長崎・平和祈念像の4分の1のレプリカ、迫力ある「日蓮」像などを見ることが出来る。102歳で亡くなるまで、現役彫刻家であり続けた。

南島原市は「彫刻のある町づくりを進め、国道251号沿いの小公園などに西望作品を立て、また島原市の島原城内にも迫力ある「日蓮像」がある。

**○ 有馬キリシタン遺産記念館**

原城を中心とした南島原のキリシタン史にかかわる史資料を保存、展示している。キリスト教伝来から、その繁栄を物語る有馬晴信時代の本城「日野出城」と支城「原城」跡からの出土品、キリスト教弾圧から島原の乱に至る経過、その後の潜伏時代の特異な宗教的伝統などが紹介されている。

場所＝南島原市南有馬町、原城跡から約2・3km。
電話＝0957・85・3217.
入場料＝大人300円、高校生200円、小学生150円



北村西望氏

**参考　長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産（ユネスコ世界文化遺産）**

関連遺産は天草―島原―西彼杵半島―平戸―五島に点在する
①天草・崎津集落（漁業と結びついた信仰形態）
②島原・原城跡（島原の乱）
③長崎市・大浦天主堂（潜伏キリシタンと宣教師の出会いの場）
④外海の出津集落（聖母像を密かに拝み、伝承）
⑤同大野集落（外海の潜伏キリシタンは五島へ移住）
⑥佐世保＝黒島の集落（信仰復活の地）

⑦平戸=中江の島
⑧平戸の聖地と春日集落(山や島を聖地として信仰)
⑨五島・久賀島集落(仏教徒と共存)
⑩奈留島の江上集落と天守堂
⑪頭ケ島の集落(共同墓地)
⑫野崎島の集落

# 五　癒しの温泉リゾート街道

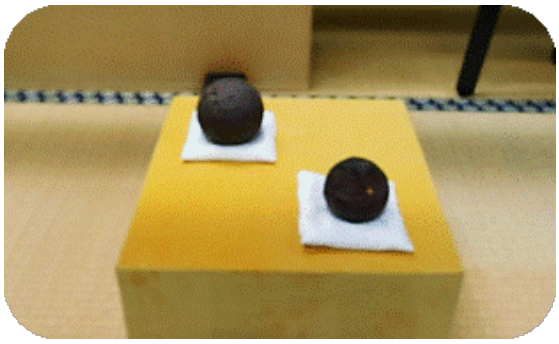
## 1　外国人避暑地の先駆け・雲仙

### 日本最初のパブリックコース・雲仙ゴルフ場
### 外国避暑客で賑わうお山の温泉地

仁田峠、さらに妙見峠に登る途中、足元を見ると、山間に広々と芝生のグリーンが広がっているのが見える。雲仙ゴルフ場、1913年(大正10年)にオープン、日本パブリックゴルフ場の先駆けとなった。雲仙温泉街から少し上ると、国道57号沿いに尖塔を持つ、ちょっとおしゃれなクラブハウスが建ち、多くのプレーヤーが談笑していた。「あなたもやりませんか」と声を掛けられた。気取ることないゴルファーたち。このゴルフ場は、避暑にやってきた外国人たちをターゲットに、長崎県が開設(現在は民間経営)した。9ホール全体的にフラットなコースだ。

有馬キリシタン遺産記念館

隠れキリシタンのマリア観音像


原城に撃ち込まれた砲弾

### ○「チエアカゴ」に乗って山登り

雲仙への外国人避暑客は明治初めから増え始めた。山間の古湯だった雲仙温泉は外国人によって再発掘、リゾート地となった。暑い上海などから逃げ出して、上海航路で長崎港へ、さらに船を仕立てて橘湾を渡り、小浜温泉。最初はここの海水浴を楽しんでいたが、やがて「チエアカゴ」に乗って雲仙温泉に登ってきた。家族連れが4人の駕籠かきにかつがれる様子を、お山の情報館別館展示の写真で見ることが出来る。家族連れ、しかも長期滞在の為、温泉街・ホテルは宿泊料金を押さえ、多くの避暑客を招き入れた。雲仙温泉街には洋風のホテルが並び、他の温泉には見られないリゾート地の景観が作られた。

外国人の雲仙登山は、幕末(安政年間)、高島炭鉱技師・ブラウン氏が禁令を犯して登山、明治3年米海軍軍人7人がボーイ、コックを連れて逗留した記録がある。次第に外国人の登山者が増え、明治16年ごろから、従来の日本式宿屋でなく、洋式のホテルが続々と登場してきた。下田ホテル、新湯ホテル、雲仙ホテル、九州ホテル、富貴屋ホテル、有明ホテルなどが営業を始めた。

雲仙教会

### ○　行き交う外国人たち

明治中期になると、避暑地・雲仙の知名度も高まり、避暑に訪れる外国人が増え、県営の雲仙観光ホテルもオープンした。温泉街を行き交う人もイギリス人、アメリカ人、ロシア人など、しかも家族連れで、長期滞在した。娯楽館では舞踏会、パーティが開かれ、テニスコート、プール、馬場、教会も。

特にゴルフ場は(大正2年開設)

は六甲などに次いで日本４番目、最初のパブリックコースとしてオープン、大正時代には標高７５０ｍの爽快な高原コースとして、人気は高まり、上海、香港、シンガポールなど在住する外国人ゴルファーがプレーした。

チェアかごで雲仙に登る外国人

雲仙のパーティを楽しむ外国人

日本で２番目のパブリックコース・雲仙ゴルフ場

### ○ 塔を持つクラブハウス

このゴルフ場は３８万㎡、９ホール、３２００ヤード、パー３６．機械力を使わない手造りで自然の地形を生かしたコース。クラブハウスは平成７年に建て替えられた。緑の草原に赤い屋根で塔とクラブハウスを持ち、２階レストランからは正面に妙見岳が見えるなど雲仙の景観に溶け込んでいる。現在、県営ゴルフ場から「雲仙ゴルフ場株式会社」となっている。

山だけではない。海辺も外国人の人気を集めた。小浜温泉の海水浴場をはじめ、さらに南に下って加津佐の浜辺も外国人家族で賑わい、ホテルも建った。海水浴を楽しむのは外国人家族が多く、案内標識なども英語が主流だった。

「避暑客の外国人３０か国に及び、滞在者数五百乃至六百を越え、一年間約三万人の外国人を見る盛況である」（昭和二年）と国立公園指定陳情書にある。訪れた外国避暑客からも国立公園化の陳情、署名が行われ、昭和七年、富士山と並んで雲仙は国立公園となっている。

そんな異国情緒あふれる温泉街は日本人富裕層の人気も集めた。

それから１００年、当時の外国人避暑地の光景は消えたが、次第に、外国人客も回復、普賢岳登山やウオーキングする外国の若者の姿も見られるようになった。若者中心の雲仙フェスタなどのイベントも人気を呼んでいる。

### ○ 雲仙ゴルフコース

外国人の避暑地として雲仙が成長するにつれ、長崎在住の外国人銀行家や、貿易商・グラバーの長男で、実業家・倉場富三郎氏らの発想で、ゴルフ場建設の機運が高まり、長崎県も積極的な推進役を演じた。神戸・六甲コースなどを見学するなどして、英国人二人に設計を依頼、９ホールのコースを建設した。大正３年にはトーマス・クック社東洋支配人グリーン氏によりレベルの高いゴルフコースに改造を依頼した。

これを機に、パブリック制を改め、ゴルフクラブ組織（当初会員４０人）を発足させた。次第に来場者も増え、長崎県知事がクラブの会長を務め、国際リゾートゴルフコースとしての地位を固めた。名物はゴルフ場内に馬が放牧されたり、烏がゴルフボールを加えて逃げるためキャディが大声で追い払うなど話題の多いゴルフ場として親しまれた。戦争中は敵性スポーツとして閉鎖されたが戦後は進駐軍専属ゴルフコースとなるなど、時代の波に洗われて、今日に至っている。

## ２　温泉めぐり

### 小浜、雲仙、島原、三つの温泉を楽しむ

### 海と山、泉質も異なる温泉群

島原半島めぐりの、楽しみは何といっても「温泉めぐり」だ。雲仙という地名はも

ともと「温泉」から、きているという。島を横断するように西から小浜温泉、雲仙温泉、島原温泉と海と山の温泉が交互に並び、泉質も違う。タオル一本、「ひと風呂、浴びますか」――。

## ① 小浜温泉

橘湾に面した海岸沿いに温泉旅館が並ぶ。人気は海水浴場の浜辺に沿って造られた長大な足湯「ホットフット１０５」で、雲仙行きのドライバーが一休み、「ちょっと、足湯」して行く。橘湾のマグマだまりに近いため、地下温度は１１０度にも達する。慣れないと足が火傷しそうな熱湯が惜しげもなく流れていく。

浜辺の温泉として古く、１３００年前の「肥前風土記」にも登場する。下って、江戸時代、島原の乱の「引き金」となるほど苛政をしいた島原城主・松倉重信もこの温泉に通い湯治したが、ここで亡くなった。

橘湾に面した日本１長い足湯には、腰かけて湯に足をつけるほか、足つぼのウオーキング足湯もある。高熱を利用した蒸釜もあって、自由に利用できる（カゴ代２００円）。１日１５００ｔも湧出する熱湯を利用した「バイナリー発電」も行われ、一般家庭に電力を供給している。

歌人・斉藤茂吉は温泉のほか橘湾に沈む夕日を愛した。夕陽の時刻は１０～から１月が１７時台、２月～３月・９月が１８時台、５～８月が１９時台。

【湯の街さるくコース】
夕陽の広場（斉藤茂吉歌碑）―小浜公園
―いぼとり地蔵―小浜公会堂（昭和９年建造、木造で長崎県内で最も古い）
―上の川湧水―炭酸泉（唯一の冷泉）
―小浜歴史資料館

齊藤茂吉の歌碑

小浜温泉の足湯「ホットフット１０５」

## ② 雲仙温泉

「明治初年頃まで、極めて原始的なる浴場設備と二～三の旅館があるのみ」（昭和七年・雲仙大観）だった雲仙温泉は登山に訪れる外国人が明治初めから多くなり、温泉を楽しむようになった。

「地獄めぐり」は、この温泉の物語を様々に伝える。３０余りもある地獄の熱湯で、キリシタンが拷問を受け殉教した。その記念碑のほか、お糸地獄、清七地獄など悲劇に由来する、山岳特有の地獄である。

道を挟んで、満明寺がある。１３００年も前の大宝元年（７０１）、奈良の大仏の建立に力を尽くした僧・行基が開山、と伝えられている。

明治十年代になると、「ホテル」が次々と建設されてゆく。九州ホテル、有明ホテル、富貴屋など現在も知られている有名ホテルが登場してくる。明治三十年ごろには小浜温泉から雲仙温泉への道路整備が進んで、一般客も増えて「九州の軽井沢」となった。

【温泉山（雲仙）史跡歴史散歩】
満明寺―行基の墓―温泉山八十八カ所巡り
―竜造寺隆信五輪の塔―温泉神社―鬼石―弘法大師像
―大黒磨崖仏―三鈷の松―一切経の瀧―智恩堂

高温の源泉（小浜温泉）

## ③ 島原温泉

島原市内には温泉を楽しむ足湯が２カ所、飲泉場が６か所設置され、街めぐりに一息つける。戦後、ボーリングで温泉開発された。泉質は重炭酸土類泉で、温度は最高４１度程度。炭酸ガスが溶け込んで、肌に気砲が付くのが特徴だ。サイダー泉とも呼ばれている。

島原市内には7カ所の飲泉所があり「飲む温泉」。糖尿病、痛風、胃腸病に適応するとされる。足湯は「ゆとろぎ足湯」や源泉公園足湯などがある。

◇　◇

### ○ ミヤマキリシマが彩るゴルフ場

火山噴気が立ち込める「地獄」と温泉、高地のさわやかな空気などから保養地としても人気が高まって、明治四十五年（１９１２）、神戸・六甲に次いで、日本で二番目のゴルフ場も誕生した。設計は英国人。海抜８８０ｍの雲仙岳の中腹に、日本最初のパブリックコースが登場した。誕生から１００年を越え、現在は9ホールの民間ゴルフコースとなっている。

ゴルフ場に沿ってミヤマキリシマ約５万本が群生（天然記念物）している。４月下旬から咲き始め、山を登って５月中下旬には仁田峠で１０万本が山腹をピンクに彩り、多くの観光客を楽しませる。６月中旬からは白い花を咲かせるヤマボウシの登場、雲仙の初夏を演出する。

秋、一〇月中旬からは紅葉がピークを迎える。妙見岳に登るロープウエイからの赤く山を染める景観は圧倒的。冬には木々の枝に結晶する霧氷が見事だ。

### ○ 真知子の地獄めぐり

雲仙の霧氷を全国にＰＲしたのは、ラジオドラマ「君の名は（主演岸恵子、佐田啓二）」で、映画化された。主人公の真知子の名を取った大岩も地獄の湯煙の中にある。

雲仙温泉街

湧水庭園「四明荘」（国登録無形文化財、島原市新町）

# 3　火山学者からのメッセージ

## 「火山を災害と恩恵両面から見て」

太田一也・九州大学名誉教授
（九州大学雲仙火山研究所元所長）

１９８年ぶりに雲仙普賢岳が噴火（平成２年１１月）しましたが、巨大な溶岩ドームの形成は４千～５千年に一度の出来事です。普賢岳の横に出来た「平成新山」の頂上に、巨大な溶岩ドームは張り付いています。崩れ落ちて、また被害を出さないか、日々、監視観測が続けられています。実際、その「１１号ドーム」が一部、崩落しました。幸い被害は出ませんでしたが、噴火活動が収束して、今は、わずかに白い煙が上がっているだけでも、雲仙からは目を離せない状態が続いています。

### ○　崩壊した眉山―島原大変

島原を訪れる人は、武家屋敷の清らかな水が絶え間なく流れる水路を訪れると思います。その水は、「島原大変肥後迷惑」と言われる眉山の山体崩壊によって、城下町に水が湧き出るようになったのです。

眉山は普賢岳の「前」にある山で、普賢岳の噴火活動による地震で大規模な崩れを起こしました。崩れ落ちた大量の土石は海岸線を８００ｍも沖合に押し出しました。「がまだすロード」横に造った展望所から見上げると、眉山崩壊のすごさが一望できます。他に類を見ない素晴らしい景観です。

「島原大変」は寛政４年（１７９２）に普賢岳の火山活動によって引き起こされたものです。雲仙半島は幾つもの火山で出来た複成火山です。半島中央部は雲仙地溝帯状に落ち込み、その幅は約８ｋｍ、深さ２００ｍ。断層が返答東西に横断しています。

### ○　横断する二つの地溝帯

橘湾沿いの千々石展望台は北側の千々石断層の縁にあり、橘湾に大断層で落ちている、この展望所からは美しく円を描いている橘湾の景観を楽しむことが出来る。一方南側の断層は、小浜温泉の南から「金浜断層」が高岩山（標高８８１ｍ）まで延び、そこから布津断層が有明海の海岸線（布津新田）まで続いています。

この二つの断層による地溝帯の割れ目からマグマが吹きだし、雲仙の火山活動となる。橘湾は噴火によって陥没したカルデラ（千々石カルデラ）で、湾の中央にマグマだまり（海底から数１０ｍの地下）があり、そこから斜め上に火道が走り、普賢岳の噴火活動が生じている。

島原を訪れる人は、温泉を楽しんでいます。このマグマに由来する火山性温泉です。普賢岳の噴火を引き起こした橘湾の「マグマだまり」から、斜めに上昇するマグマから分離した火山ガスが溶け、熱せられた地下水が地表に湧き出たのが雲仙の温泉です。

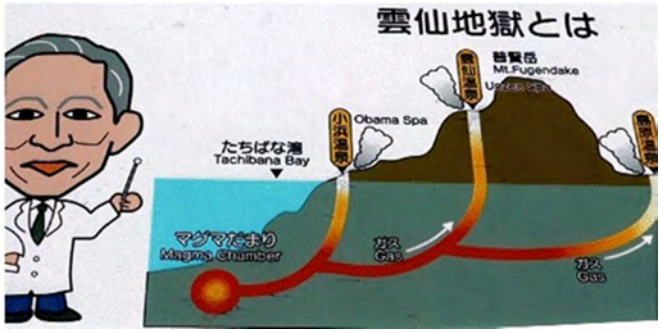
### ○　温度、泉質が異なる３つの温泉

橘湾沿いの小浜温泉は高熱の食塩泉、山岳の雲仙温泉は高温の噴気を伴う硫黄泉、島原温泉はやや低温の重曹泉。橘湾地下のマグマだまりから東に向かって斜めに上昇、千々石断層の破砕帯に来ると、真上に上昇、地上で温泉として湧出する。その最初が小浜温泉で約１００℃と高温を維持している。

雲仙温泉は金浜断層に沿って、ガス成分が上昇し、山岳地帯の浅い地下水に溶け込み、湧出して、温泉と地獄を形成している。島原温泉まで来ると深度も浅くなり温泉の温度も低温になってくる。橘湾のマグマだまりからの距離によって遠くなれば、お湯の温度は下がり、それぞれの個所での溶けるガスの成分によって３つの温泉の泉質も変わります。

雲仙地獄は、高地にあり地下水が乏しく、高温で強い酸性ガスの噴気によって、ふつふつと噴き出す火山ガスによって特異な地獄の景観が生まれるのです。小浜～雲仙～島原の３つの温泉の違いをそれぞれ楽しんでいただきたい。

火山噴火は大きな被害を出しますが、同時に、癒しの温泉や素晴らしい複成火山の景観を創り出します。温泉と景観、いずれも火山の恩恵です。



# 六　雲仙の四季を楽しむ

## 1　春夏秋冬の花たち

雲仙は、春、夏、秋、冬それぞれの四季ごとに、花が咲き、紅葉し、厳冬には霧氷と彩を変える。また、季節ごとに野鳥のさえずりも変わる。

雲仙を代表するのは5月からのミヤマキリシマ。仁田峠を中心に様々な所でピンクに山を染める。阿蘇、霧島など九州の火山土壌特有の花だが、放牧牛馬が食べないため群落を作って、一面、ミヤマキリシマのお花畑になる。仁田峠のほか、池之原、宝原、田代原など放牧草原に群落を楽しむことが出来る。

6月、梅雨時になると、ヤマボウシが山腹を白く彩る。夏山シーズンの登山者の疲れを癒してくれる花だ。国道３８９号を多比良方面から登ると途中、ヤマボウシの群生を見ることが出来る。雲仙温泉街では白雲の池周辺や衣笠山、矢岳などで見ることが出来る。

秋は、紅葉。仁田峠に始まって普賢岳にかけては紅葉樹林帯(国天然記念物)。標高９５０ｍ以上は落葉広葉樹林帯、その下の６００ｍまでの照葉樹林帯との混交林の紅葉も見逃せない。

霧氷は北風が強く、温度が零度以下になると、空気中の霧粒が風に枝に吹付けられ、結晶として成長して行く。地元では「花ぼうろ」と呼ばれている。

雲仙の原生沼は、かつて、地獄と同様、火山ガスが噴出していたが、今はその噴気が弱まって、ミズゴケ湿原が広がり、カキツバタやレンゲツツジが美しい景観を創り出している。今も火山ガスが吹き出る雲仙地獄では硫化水素を含む火山ガスで熱せられた湯だまりに、温泉藻が生え、「湯だまりからツクシテンツキ、ススキ、シロドウダン、赤松の順に距離を持って分布する様子が観察できる」(環境省雲仙自然保護官事務所)。

花の名所＝しまばら火張山花公園、有明の森フラワー公園、百花台公園、日野江城など。

雲仙お山の情報館には雲仙花図鑑が用意されている。同情報館では、「雲仙の美しい自然や花々をめでて楽しみましょう。お持ち帰りは思い出と記録だけ、採取は止めましょう」と呼びかけている)

秋の紅葉

春のミヤマキリシマ

冬の霧氷

夏のヤマボウシ

## 2　島原の郷土料理

**島原具雑煮**＝島原半島の海の幸、山の幸、盛り沢山。

**島原手延べそうめん**＝４００年以上にわたって島原で作られているソーメン。夏の冷やしソーメン、冬の温ソーメンも。

**かんざらし**＝女性に人気のスイーツ。島原の清い湧水を使っている。大寒の季節、さらしたもち米を使っている。

**島原のフグ料理**＝①ガンバの湯引きは、湯引きしたフグを梅干し、醤油、酢を合わせたタレともみじおろしの薬味で食べる。②がね炊きは、ぶつ切りのフグをニンニクの芽、しょうゆで炊く。

### コラム　島原のスクイ

島原半島の伝統漁法「スクイ」（石干見）遠浅の海岸沖合に石積みの堤防を造る。全長２７６ｍ、高さ２・４ｍ、頂部２・５ｍ幅で、堤防内に入った魚をすくい取る。かつては半島に２１５カ所もあったが、養殖ノリ事業などによって、現在では島原市新田町地先に１か所だけが残されている。

「みんなでスクイを造ろう会」（事務局長・内田豊さん）が石積みの修理、保存などの活動を続けている。子供たちの自然体験として放流した魚を獲る「スクイ祭り」を開催しているほか海岸に生きる動植物の観察会、清掃活動、漁協と協力して「海草アマモの増養殖事業」も行っている。

「花酵母」８種類で作られた酒はそれぞれ味が違う

### 小さな旅④　はねぎ絞りの酒造。

「はねぎ」と呼ばれる大きくて太い木の先に重しをぶら下げテコの原理で強い圧力をかけ、お酒を絞り出す「はねぎ絞り」を今に伝える酒造が、南島原市有家にある。大正６年創業の「吉田屋」。全国でも数えるほどしかない、この酒造りを今日まで続けて１００年を越える。

量産できない上に手間がかかり、重労働、それでもおいしい日本酒を造るためにこだわり続けている。自然の力で絞るので、雑味がなく、優しい中にすっきりとした味となる。

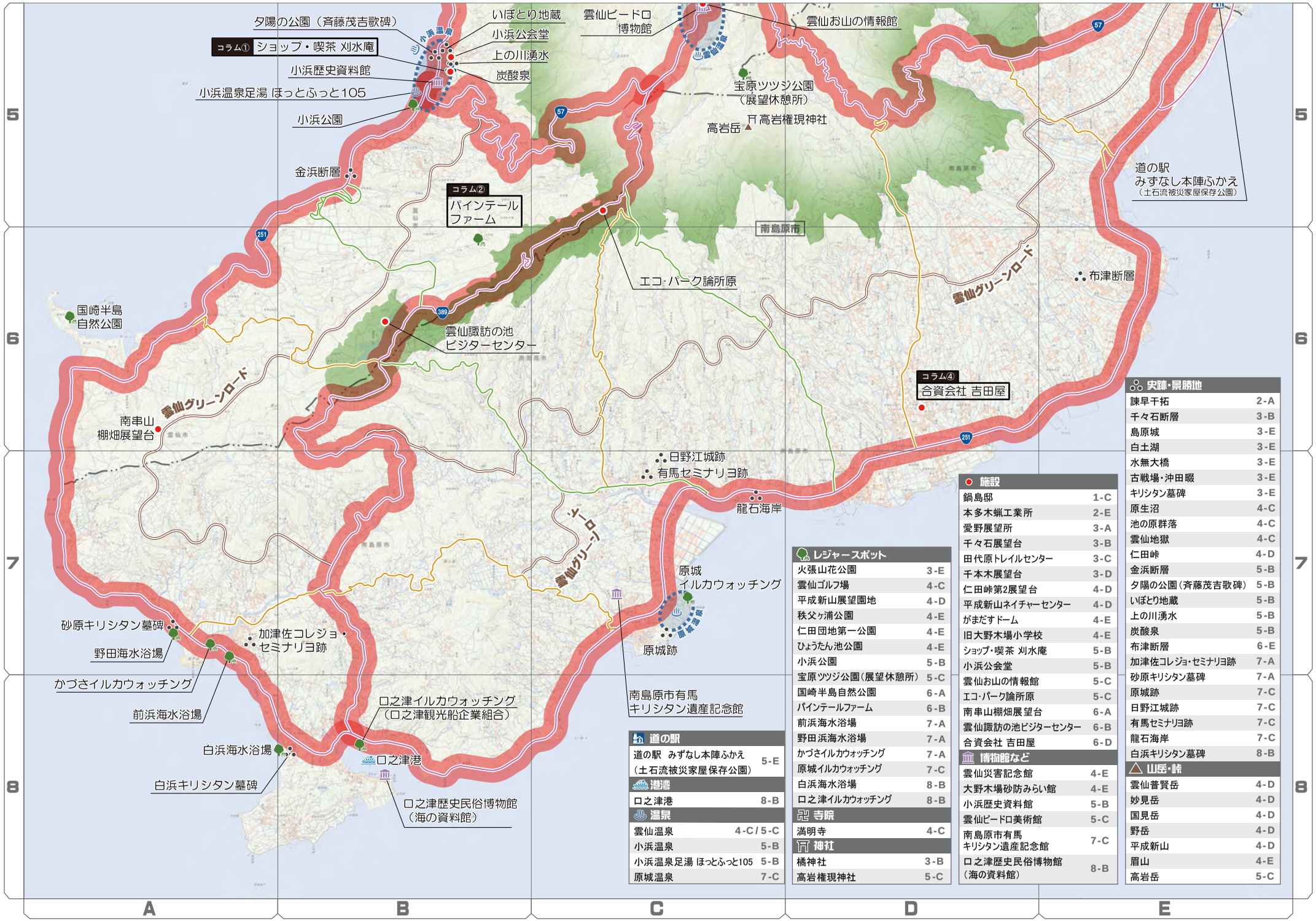
こだわりは酵母にも。東京農大醸造学科で花から分離された「花酵母」を使っている。アベリア、ひまわり、ナデシコ、ツルバラ、日日草、サクラの６種類の花酵母で造る。酒蔵は今年百一年目、天井が高いのは、酒造りに欠かせない「寒さ」を造るためだが、さすがに柱や屋根に痛みが来ている。「さて、いつまで守れるか」と蔵元兼杜氏の吉田嘉明さん。

夏、二十四畳もある自宅の一部を開放して、喫茶店（八千代）を開く（七月～九月の土日）。造り酒屋だからこその「水だしコーヒー」のほか「甘酒ぜんざい」「白玉だんご」も出している。

ふと、床の間の手回し蓄音機に気付いた。懐かしい音色に、時の流れを忘れて聞き入った。（牧圭子）

巨大な「はね木」で絶品の酒を絞り出す

合資会社　吉田屋
南島原市有家町山川７８５
TEL　０９７５-８２-２９３２




## 道の駅

| | |
|---|---|
| 道の駅 みずなし本陣ふかえ（土石流被災家屋保存公園） | 5-E |

## 港湾

| | |
|---|---|
| 口之津港 | 8-B |

## 温泉

| | |
|---|---|
| 雲仙温泉 | 4-C / 5-C |
| 小浜温泉 | 5-B |
| 小浜温泉足湯 ほっとふっと105 | 5-B |
| 原城温泉 | 7-C |

## レジャースポット

| | |
|---|---|
| 火張山花公園 | 3-E |
| 雲仙ゴルフ場 | 4-C |
| 平成新山展望園地 | 4-D |
| 秩父ヶ浦公園 | 4-E |
| 仁田団地第一公園 | 4-E |
| ひょうたん池公園 | 4-E |
| 小浜公園 | 5-B |
| 宝原ツツジ公園（展望休憩所） | 5-C |
| 国崎半島自然公園 | 6-A |
| パインテールファーム | 6-B |
| 前浜海水浴場 | 7-A |
| 野田浜海水浴場 | 7-A |
| かづさイルカウォッチング | 7-A |
| 原城イルカウォッチング | 7-C |
| 白浜海水浴場 | 8-B |
| 口之津イルカウォッチング | 8-B |

## 寺院

| | |
|---|---|
| 満明寺 | 4-C |

## 神社

| | |
|---|---|
| 橘神社 | 3-B |
| 高岩権現神社 | 5-C |

## 施設

| | |
|---|---|
| 鍋島邸 | 1-C |
| 本多木蝋工業所 | 2-E |
| 愛野展望所 | 3-A |
| 千々石展望台 | 3-B |
| 田代原トレイルセンター | 3-C |
| 千本木展望台 | 3-D |
| 仁田峠第2展望台 | 4-D |
| 平成新山ネイチャーセンター | 4-D |
| がまだすドーム | 4-E |
| 旧大野木場小学校 | 4-E |
| ショップ・喫茶 刈水庵 | 5-B |
| 小浜公会堂 | 5-B |
| 雲仙お山の情報館 | 5-C |
| エコ・パーク論所原 | 5-C |
| 南串山棚畑展望台 | 6-A |
| 雲仙諏訪の池ビジターセンター | 6-B |
| 合資会社 吉田屋 | 6-D |

## 博物館など

| | |
|---|---|
| 雲仙災害記念館 | 4-E |
| 大野木場砂防みらい館 | 4-E |
| 小浜歴史資料館 | 5-B |
| 雲仙ビードロ美術館 | 5-C |
| 南島原市有馬キリシタン遺産記念館 | 7-C |
| 口之津歴史民俗博物館（海の資料館） | 8-B |

## 史跡・景勝地

| | |
|---|---|
| 諫早干拓 | 2-A |
| 千々石断層 | 3-B |
| 島原城 | 3-E |
| 白土湖 | 3-E |
| 水無大橋 | 3-E |
| 古戦場・沖田畷 | 3-E |
| キリシタン墓碑 | 3-E |
| 原生沼 | 4-C |
| 池の原群落 | 4-C |
| 雲仙地獄 | 4-C |
| 仁田峠 | 4-D |
| 金浜断層 | 5-B |
| 夕陽の公園（斉藤茂吉歌碑） | 5-B |
| いぼとり地蔵 | 5-B |
| 上の川湧水 | 5-B |
| 炭酸泉 | 5-B |
| 布津断層 | 6-E |
| 加津佐コレジョ・セミナリヨ跡 | 7-A |
| 砂原キリシタン墓碑 | 7-A |
| 原城跡 | 7-C |
| 日野江城跡 | 7-C |
| 有馬セミナリヨ跡 | 7-C |
| 龍石海岸 | 7-C |
| 白浜キリシタン墓碑 | 8-B |

## 山岳・峠

| | |
|---|---|
| 雲仙普賢岳 | 4-D |
| 妙見岳 | 4-D |
| 国見岳 | 4-D |
| 野岳 | 4-D |
| 平成新山 | 4-D |
| 眉山 | 4-E |
| 高岩岳 | 5-C |

A
B
C
D
E
1
2
3
4
N
W
E
S
0
1
2
1:90,000
諫早湾
有明海
橘　湾
神代堤防（堤防道路）
雲仙グリーンロード
雲仙グリーンロード
がまだすロード
諫早湾干拓ロード
諫早湾干拓ロード
西郷
古部
大正
吾妻
阿母崎
鍋島邸
神代
多比良
有明湯江
大三東
松尾
三会
古戦場・沖田畷
島原城/キリシタン墓碑
島原
霊丘公園体育館
白土湖
島原船津
島原港
秩父ヶ浦公園
がまだすドーム
雲仙災害記念館
諫早干拓
千々石展望台
愛野展望所
千々石断層
橘神社
雲仙市
田代原トレイルセンター
火張山花公園
千本木展望台
島原市
平成新山ネイチャーセンター
平成新山展望園地
眉山
ひょうたん池公園
仁田団地第一公園
水無大橋
旧大野木場小学校
大野木場砂防みらい館
仁田峠第2展望所
国見岳
平成新山
雲仙普賢岳
妙見岳
仁田峠
野岳
池の原群落
雲仙ゴルフ場
満明寺
雲仙地獄
原生沼
コラム③
本多木蝋工業所
凡　例
メインルート
島原鉄道
国道
主要地方道
一般県道
国立公園
道の駅
港湾
レジャースポット
温泉
博物館など
施設
史跡・景勝地
山岳・峠
神社
寺院

千々石・吾妻周辺
N
W
E
S
0 0.5 1
km
1:60,000
諫早湾
湾奥堤防（堤防道路）
西郷
大正
古部
吾妻
阿母崎
251
57
諫早干拓
雲仙グリーンロード
雲仙市
千々石展望台
愛野展望所
千々石断層
橘神社
田代原
トレイルセンター
橘　湾
満明寺
雲仙温泉
原生沼
雲仙お山の情報館
雲仙ビードロ博物館
小浜公会堂
凡　例
メインルート
島原鉄道
国道
主要地方道
一般県道
国立公園
道の駅
港湾
レジャースポット
温泉
博物館など
施設
史跡・景勝地
山岳・峠
神社
寺院

# 有明・島原周辺

凡例
- メインルート
- 島原鉄道
- 国道
- 主要地方道
- 一般県道
- 国立公園
- 道の駅
- 港湾
- レジャースポット
- 温泉
- 博物館など
- 施設
- 史跡・景勝地
- 山岳・峠
- 神社
- 寺院

N W E S

0 0.5 1 km
1:60,000

鍋島邸
神代
多比良
有明湯江
大三東
コラム③
本多木蝋工業所
松尾
三会
有明海
雲仙グリーンロード
古戦場・沖田畷
島原城/
キリシタン墓碑
島原
武家屋敷町
がまだすロード
火張山花公園
霊丘公園体育館
白土湖
島原船津
島原港
千本木展望台
島原市
平成新山
ネイチャーセンター
眉山
平成新山展望園地
ひょうたん池公園
国見岳
平成新山
雲仙普賢岳
妙見岳
仁田峠
池の原群落
野岳
仁田峠第2展望所
雲仙ゴルフ場
雲仙ゆめ・ゆめロード
仁田団地第一公園
水無大橋
旧大野木場小学校
大野木場砂防みらい館
道の駅　みずなし本陣ふかえ
（土石流被災家屋保存公園）
秩父ヶ浦
公園
雲仙
災害記念館
がまだす
ドーム
389
251
57

加津佐・口之津周辺
N
W
E
S
0 0.5 1
km
1:60,000
いぼとり地蔵
小浜公会堂
上の川湧水
炭酸泉
コラム①
ショップ・喫茶 刈水庵
夕陽の公園（斉藤茂吉歌碑）
小浜温泉足湯 ほっとふっと105
小浜公園
小浜歴史資料館
金浜断層
コラム②
パインテールファーム
エコ・パーク論所原
雲仙諏訪の池ビジターセンター
国崎半島自然公園
雲仙グリーンロード
南串山棚畑展望台
雲仙グリーンロード
雲仙グリーンロード
砂原キリシタン墓碑
野田海水浴場
加津佐コレジョ・セミナリヨ跡
かづさイルカウォッチング
前浜海水浴場
南島原市有馬キリシタン遺産記念館
口之津イルカウォッチング（口之津観光船企業組合）
白浜海水浴場
口之津港
白浜キリシタン墓碑
口之津歴史民俗博物館（海の資料館）
57
251
389
凡例
メインルート
島原鉄道
国道
主要地方道
一般県道
国立公園
道の駅
港湾
レジャースポット
温泉
博物館など
施設
史跡・景勝地
山岳・峠
神社
寺院

雲仙・有馬周辺
N
W
E
S
0 0.5 1 km
1:60,000
389
57
251
満明寺
雲仙地獄
国見岳
平成新山
雲仙普賢岳
妙見岳
平成新山展望園地
眉山
平成新山ネイチャーセンター
仁田団地第一公園
雲仙ゆるやかロード
池の原群落
仁田峠
旧大野木場小学校
雲仙ゴルフ場
野岳
大野木場砂防みらい館
原生沼
仁田峠第2展望所
水無大橋
雲仙お山の情報館
雲仙ビードロ博物館
雲仙温泉
宝原ツツジ公園（展望休憩所）
高岩権現神社
高岩岳
南島原市
布津断層
雲仙グリーンロード
コラム④
合資会社 吉田屋
日野江城跡
有馬セミナリヨ跡
龍石海岸
南島原市有馬キリシタン遺産記念館
有明海
原城イルカウォッチング
原城跡
凡例
メインルート
島原鉄道
国道
主要地方道
一般県道
国立公園
道の駅
港湾
レジャースポット
温泉
博物館など
施設
史跡・景勝地
山岳・峠
神社
寺院

# MEMO

九州風景街道ガイドブック

**人のくに、美のくに九州　Q－15　島原半島うみやま街道　～歴史と水と温泉のまち～**

令和元年　6 月 15 日　　第 1 版
**日本風景街道九州ガイドブック編纂委員会**
樗木　武、堤　昌文、玉川孝道、吉武哲信、桝谷秀秋
島原半島うみやま街道　　担当（文責）：玉川　孝道、樗木　武
**協　力：島原半島うみやま街道推進協議会**

**発　行　九州風景街道推進会議**
風景街道推進会議事務局（九州地方整備局道路計画第二課内）

本書の内容の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き禁じられています。